

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

西大路土居遺跡
宮長竹ヶ鼻遺跡
秋里遺跡

1990

鳥取市教育委員会

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

西大路土居遺跡
宮長竹ヶ鼻遺跡
秋里遺跡

1990

鳥取市教育委員会



序 文

この発掘調査報告書は、平成元年度に国・県の補助金を受けて実施した「鳥取市内遺跡」の発掘調査記録です。

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えています。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき貴重な市民の財産です。このような認識のもと、鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関との協議を重ね、また地元の方々の深いご理解をいただきながら文化財保護行政を進めているところです。

さて、本年度に実施しました秋里・西大路土居・宮長竹ヶ鼻各遺跡の発掘調査事業も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって、無事所期の目的をはたしことに報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成2年3月

鳥取市教育委員会

教育長 田中哲夫

例　　言

1. 本書は、平成元年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は、秋里遺跡、西大路土居遺跡、宮長竹ヶ界遺跡である。
3. 調査の期間は、平成元年9月12日から平成2年3月20日である。
4. 本書に用いた方位は、遺跡分布図を除き磁北を示し、レベルは海拔標高である。
5. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
6. 発掘調査の実施にあたっては、下記の関係者、関係機関の指導と協力をいただいた。
米澤茂都　山田峯歲　北風一郎　木村義厚　木下秀美　木下美子　坂本正博　小谷善之　木下英太郎　山形勤三　伊佐田直代志　森本定和　建設省鳥取工事事務所　鳥取県教育委員会文化課
鳥取県埋蔵文化財センター　鳥取市建設部計画課（順不同、敬称略）
また、現地調査、本書作成にあたっても、山田真宏氏ほか多くの方々に多大なご協力をいただいた。記して謝意を表したい。
7. 発掘調査の体制は、下記のとおりである。

発掘調査主体　鳥取市教育委員会　教育長　田中哲夫
事務局　鳥取市教育委員会　社会教育課　文化係
調査担当者　小杉宗雄　平川　誠　北浦弘人　前田　均

本文目次

序文

例言

Iはじめに	1
1.発掘調査の契機と目的	1
2.発掘調査の経過	1
II西大路土居遺跡	2
1.遺跡の位置と周辺の遺跡	2
2.発掘調査の概要	6
III宮長竹ヶ鼻遺跡	14
1.遺跡の位置と周辺の遺跡	14
2.発掘調査の概要	14
IV秋里遺跡	23
1.遺跡の位置と周辺の遺跡	23
2.発掘調査の概要	25
Vまとめ	34

挿図目次

第1図 鳥取市宮長、西大路周辺道路分布図	3	第14図 宮長竹ヶ鼻遺跡第5,6トレンチ平面・断面実測図	18
第2図 西大路土居遺跡トレンチ配図図	4	第15図 宮長竹ヶ鼻遺跡第1,2,3,4,5,6トレンチ出土遺物実測図	19
第3図 西大路上居遺跡第1,2,3,5トレンチ平面・断面実測図	5	第16図 宮長竹ヶ鼻遺跡第7トレンチ平面・断面実測図	20
第4図 西大路土居遺跡第1トレンチ出土遺物実測図(1)	6	第17図 宮長竹ヶ鼻遺跡第8,9,10トレンチ断面実測図	21
第5図 西大路土居遺跡第1トレンチ出土遺物実測図(2)	7	第18図 鳥取市秋里周辺道路分布図	22
第6図 西大路土居遺跡第1トレンチ出土遺物実測図(3)	8	第19図 秋里遺跡トレンチ配図図	23
第7図 西大路上居遺跡第1トレンチ出土遺物実測図(4)	9	第20図 秋里遺跡第1トレンチ平面・断面実測図	24
第8図 西大路土居遺跡第2,3,4トレンチ出土遺物実測図	10	第21図 秋里遺跡第1,2トレンチ出土遺物実測図	25
第9図 西大路土居遺跡第4トレンチ出土遺物実測図	12	第22図 秋里遺跡第2トレンチ平面・断面実測図	26
第10図 西大路土居遺跡第4トレンチ平面・断面実測図	13	第23図 秋里遺跡第2トレンチ出土遺物実測図	27
第11図 宮長竹ヶ鼻遺跡調査地内トレンチ配図図	15	第24図 秋里遺跡第3トレンチ出土遺物実測図	28
第12図 宮長字宝殿採集遺物実測図	16	第25図 秋里遺跡第3トレンチ平面・断面実測図	28
第13図 宮長竹ヶ鼻遺跡第1,2,3,4トレンチ平面・断面実測図	17	第26図 秋里遺跡第4トレンチ平面・断面実測図	29

第27図 秋里遺跡第4, 6トレンチ出土遺物実測図	30	第31図 秋里遺跡第8トレンチ断面実測図	32
第28図 秋里遺跡第5トレンチ断面実測図	30	第32図 秋里遺跡第9トレンチ断面実測図	33
第29図 秋里遺跡第6トレンチ平面・断面実測図	31	第33図 秋里遺跡第10トレンチ平面・断面実測図	33
第30図 秋里遺跡第7トレンチ断面実測図	31		

図 版 目 次

図版1 1. 西大路土居遺跡調査地近景（北から）	3.	同第6トレンチ壁面部分（南西から）
2. 同（東から）	4.	同第7トレンチ（北東から）
3. 同第1トレンチ（南東から）	図版7 1. 宮長竹ヶ鼻遺跡第7トレンチ（南西から）	
4. 同堅穴住居状遺構（南西から）	2. 同第8トレンチ（北東から）	
図版2 1. 西大路土居遺跡第2トレンチ（北西から）	3. 同第9トレンチ（北西から）	
2. 同第3トレンチ（南東から）	4. 同出土遺物（T4, T5, T6）	
3. 同第4トレンチ（南東から）	図版8 1. 秋里遺跡調査地近景（南西から）	
4. 同第4トレンチ遺物出土状況（北東から）	2. 同1トレンチ（北から）	
図版3 1. 西大路土居遺跡出土遺物（T1）	3. 同（北から）	
2. 同（T1）	4. 同第2トレンチ（西から）	
3. 同（T1）	図版9 1. 秋里遺跡第2トレンチ（北から）	
4. 同（T1）	2. 同（東から）	
5. 同（T1）	3. 同第3トレンチ（西から）	
6. 同（T1）	4. 同（西から）	
図版4 1. 西大路土居遺跡出土遺物（T4）	図版10 1. 秋里遺跡第4トレンチ（北から）	
2. 同（T2）	2. 同（北から）	
3. 同（T4）	3. 同第6トレンチ木組遺構検出状況（南から）	
4. 同（T2）	4. 同第6トレンチ（北から）	
5. 同（T4）	図版11 1. 秋里遺跡第7トレンチ（東から）	
6. 同（T4）	2. 同第8トレンチ（南西から）	
図版5 1. 宮長竹ヶ鼻遺跡調査地遠景（南東から）	3. 同第10トレンチ（東から）	
2. 同（南東から）	4. 同出土遺物（T1, T2）	
3. 第2トレンチ（北西から）	図版12 1. 秋里遺跡出土遺物（T2）	
4. 第3トレンチ（北西から）	2. 同（T2）	
図版6 1. 宮長竹ヶ鼻遺跡第5トレンチ（南東から）	3. 同（T3, T4）	
2. 同第6トレンチ（北東から）	4. 同（T4, T6）	

I はじめに

鳥取市は、鳥取県の東部に所在し面積239万m²、人口14万人余を擁する山陰の中核都市である。鳥取県の県庁所在地として政治・経済の中心的役割を担っている。鳥取市の北側は、鳥取砂丘をへて日本海が広がり、他の三方は中国山地から続く山地によって囲まれている。市域の中心は、千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占めており、西北部には潟湖である湖山池がある。近年まで平野部は主に水田として利用され、平野縁辺の丘陵では二十世紀梨を中心とする果樹栽培が行われてきた。しかし、近今は企業進出による工場用地の造成、宅地造成などによって土地利用の変化が著しく、特に平野部の景観は一変しつつある。

さて、肥沃な鳥取平野は、古代から重要な生産基盤として人々の生活を支え、政治・経済・文化・交通の要地としての位置を占めてきた。このような地理的条件を背景として、鳥取市域には数多くの遺跡が残されている。これまでの分布調査によって約2000カ所近くの古墳、遺物散布地などの埋蔵文化財包蔵地が発見されている。このため、各種開発事業との調整が必要となる遺跡も近年増加の一途をたどっている。今回報告する西大路上店遺跡、宮長竹ヶ鼻遺跡、秋里遺跡の発掘調査も開発事業に伴って実施することになったものである。

1. 発掘調査の契機と目的

昭和62年2月、国道29号バイパス建設予定地内の埋蔵文化財の所在について建設省鳥取工事事務所から鳥取県教育委員会あてに所在確認があり、これを受けた県・市教育委員会では当該地の踏査を実施した。この踏査によって西大路、宮長両地区に遺物散布地の所在することが新たに確認され、この踏査結果については昭和63年1月県教育委員会から建設省鳥取工事事務所へ回答がなされた。しかし、両地区的遺跡については、遺物散布地ということだけで具体的な遺跡の性格などは不明のままであった。このため、両地区的遺物散布地について、その範囲、遺構の有無、遺跡の性格などの詳細な資料を得ることを目的として発掘調査を実施することとなった。

秋里遺跡は、昭和49年の国道9号鳥取バイパス建設工事によって発見された遺跡である。その後の発掘調査などによって、弥生時代から中世まで旧千代川の自然堤防上に断続して営まれた祭祀、集落遺跡であることが明らかになっている。昭和63年9月、鳥取市建設部計画課からこの秋里遺跡の西南側18.6ヘクタールで区画整理事業を実施したい旨協議があった。秋里遺跡の西南部はこれまで発掘調査が行われておらず、遺跡の範囲も分布踏査による推定の域を出ないものであった。そこで今回、遺跡の範囲と遺跡の埋蔵状況の詳細を確認することを目的として発掘調査を実施したものである。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は、西大路地区から着手し、その後、宮長地区、秋里遺跡と順次実施した。西大路地区は平成元年9月12日から10月2日まで、宮長地区は平成元年10月9日から11月10日まで、秋里遺跡

は平成元年12月5日から平成2年2月13日にすべての現地作業を終了した。出土遺物などの整理、報告書作成作業は、それぞれの現地調査終了後に順次行った。

発掘調査面積は、西大路地区50m²、宮長地区215m²、秋里遺跡178m²で合計443m²になった。

発掘調査は、前述のとおり開発計画の調整資料を得るために試掘調査という基本的な性格のため、各遺跡ともトレンチないしグリッドによる遺構の確認に主眼をおいて行なった。調査した試掘坑について、平面図及び断面図を作成し写真撮影を行なった。

西大路地区、宮長地区の遺物散布地とも今回の発掘調査の契機となった国道29号バイパス予定地内の分布踏査によって発見された遺跡である。分布踏査時には、須恵器、土師器の小片が少量散布していたものである。このため、遺跡の範囲も明確ではなかった。今回の発掘調査の成果を踏まえ、今後、西大路土居遺跡、宮長竹ヶ鼻遺跡と呼称したい。

II 西大路土居遺跡

1. 遺跡の位置と周辺の遺跡

西大路土居遺跡は、鳥取市西大路内に所在し、JR鳥取駅の南南東約2.6kmの大路山の北北西側山裾部に位置する。標高105mの大路山は、比較的急峻な独立丘陵で鳥取平野の各所から望むことができる。山裾には東大路・中大路・西大路の各部落が営まれている。大路山の東から北側には千代川の支流である大路川が流れ、西側は開けて水田地帯が広がっている。

この大路地区的遺跡分布状況は、これまで20基で構成される大路山古墳群、南側山裾に土師器、須恵器などの散布する大路山遺跡が知られていたが、いずれも発掘調査などは行なわれてはいない。本遺跡の所在する鳥取平野中央部での遺跡分布の様相は、大路地区に見られるように独立丘陵上の古墳群及びその周縁部の微高地に営まれた小規模な遺物散布地に限られ、これまでのところ沖積地での大規模な集落遺跡は未発見である。

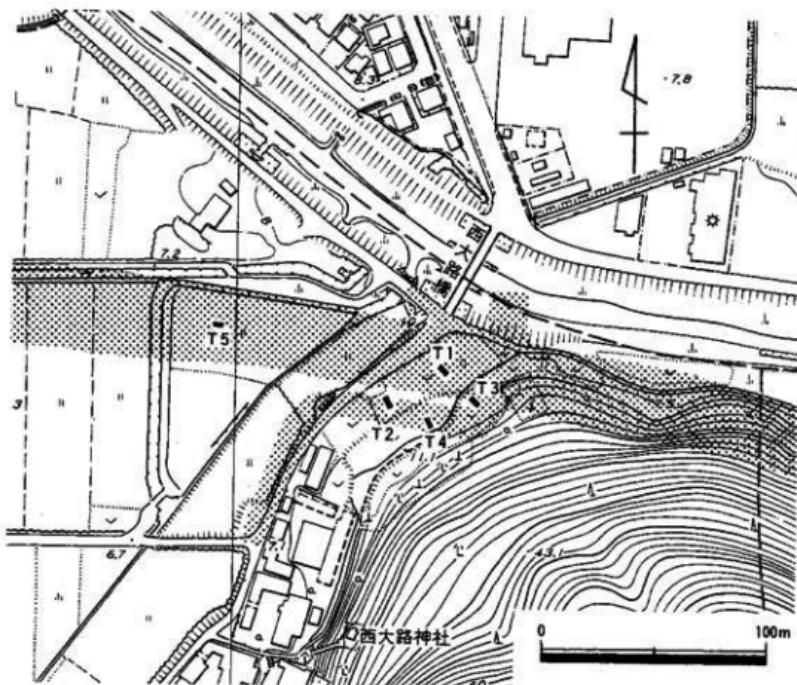
さて、周辺部の遺跡について概略を記しておきたい。鳥取市域の绳文遺跡は、砂丘地及びその後背地に集中して発見されており、鳥取市南部の绳文遺跡としては、唯一本遺跡の南約2kmの古郡家地内で大路川遺跡が確認されているのみである。晩期前半の遺跡でトチ、アラカシといった堅果類の貯蔵穴が検出された。弥生時代の遺跡は、近年平野南部丘陵地を中心に調査事例が増加しつつある。集落遺跡としては、弥生中期から古墳時代まで断続的に営まれた久末・古郡家遺跡、生山大池遺跡がある。前者からは掘立柱建物跡、後者からは多数の堅穴住居跡が検出されている。このほか、標高50m~80mの丘陵高所に営まれた弥生時代後期後半の堅穴住居跡の存在も近年の調査で明らかになっており注目される。墳墓遺跡としては本遺跡の南東約3kmに位置する紙子谷遺跡がある。後期後半のいわゆる墳丘墓が2基検出されている。また、越路地内には外縁鉢2式の流永文銅鐸出土地がある。

古墳時代にはいると、大路地区の北東1kmの面影山には総数80基余りの面影山古墳群が築造され

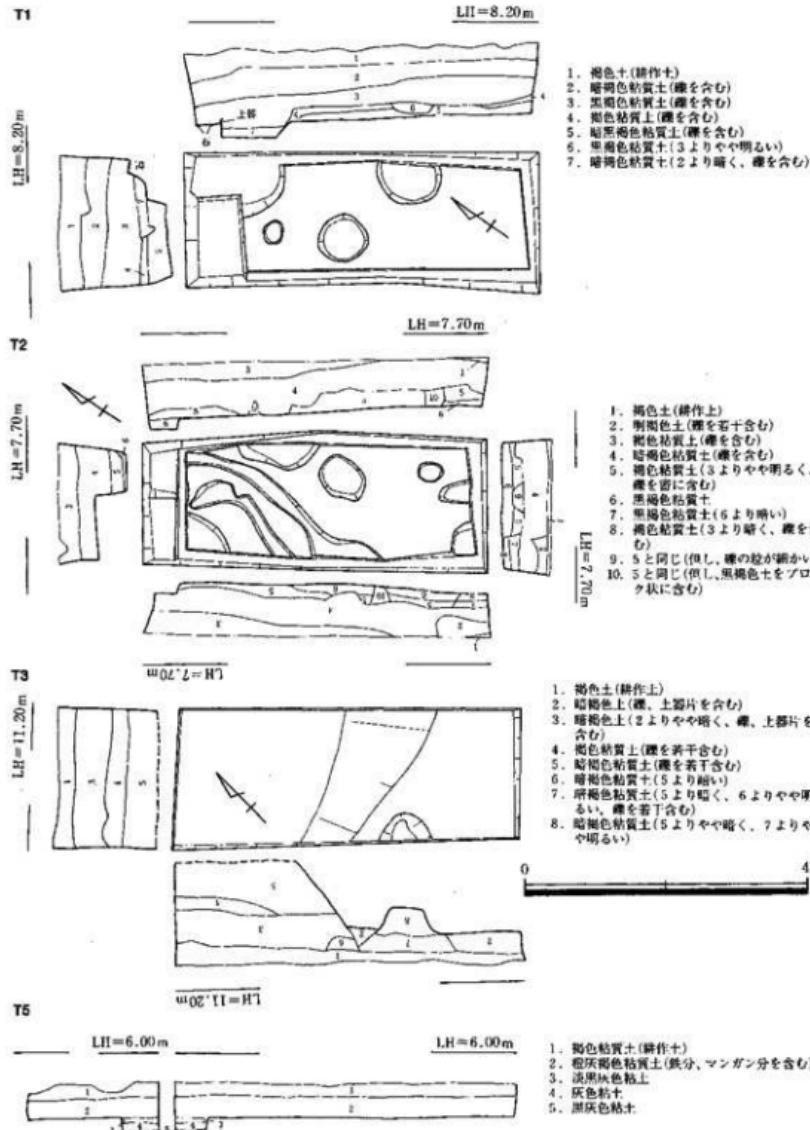


第1図 烏取市宮長・西大路周辺遺跡分布図

る。これまでに全長約31mの小型前方後円墳（11号墳）、船載の内行花文鏡が出土した74号墳などが発掘調査されている。本遺跡の南部の丘陵地帯は古墳の密集地域として知られていて、美和、古郡家、六部山、広岡、空山、紙子谷、生山、津ノ井などの古墳群が展開している。大半が小規模な古墳であるが、前・中期を代表する大型前方後円墳として六部山3号墳、古郡家1号墳がある。この時期の小規模古墳は、木棺、箱形石棺を埋葬施設として丘陵頂部、稜線上にまとまりを持って築造され、墳丘は方形から円形に変化していくようである。また、この地域は、空山古墳群など横穴式石室を内部主体とする後期群集墳が展開する。その中には、線刻壁画を伴う古墳があって一つの特徴となっている。また、先年調査された広岡古墳群からは、金銅装主頭大刀、銀象嵌大刀が出土している。古墳時代の集落遺跡についての調査事例は少ない。弥生時代から継続して営まれている前期の遺跡がほとんどである。中・後期の集落遺跡はこれまでのところ知られておらず実態は不明のままである。他に古墳時代に関連する遺跡として、越路の須恵器古窯跡群があげられる。



第2図 西大路土居道路トレーンチ配置図（網は道路予定地）



第3図 西大路土層遺跡第1.2.3トレンチ平面・断面実測図

2. 発掘調査の概要

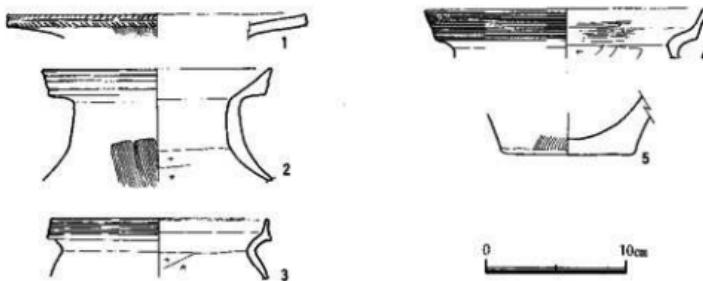
調査地は、大路山の北北西の山裾からその西側の水田部に位置している。調査はトレンチによって行ない、標高7~11mの山裾の台地に4本、標高4.6mの水田部に1本、合計5本設定した。すべて2×5mのトレンチで総面積50m²である。

調査は、耕作土を除去した後、平面的に遺構の有無を確認することで進めていった。その結果、第5トレンチを除く各トレンチで土坑、竪穴住居状遺構、溝状遺構、柱穴状遺構などを確認したが、調査面積などの制約によって遺構の規模など全体像を把握するまでには至らなかった。しかし、各トレンチ内の遺物出土状況及び土層断面の観察によって、各時代における遺構のおおよその分布状況を捉えることができた。以下、各トレンチの掘り下げ結果の概略を述べていきたい。

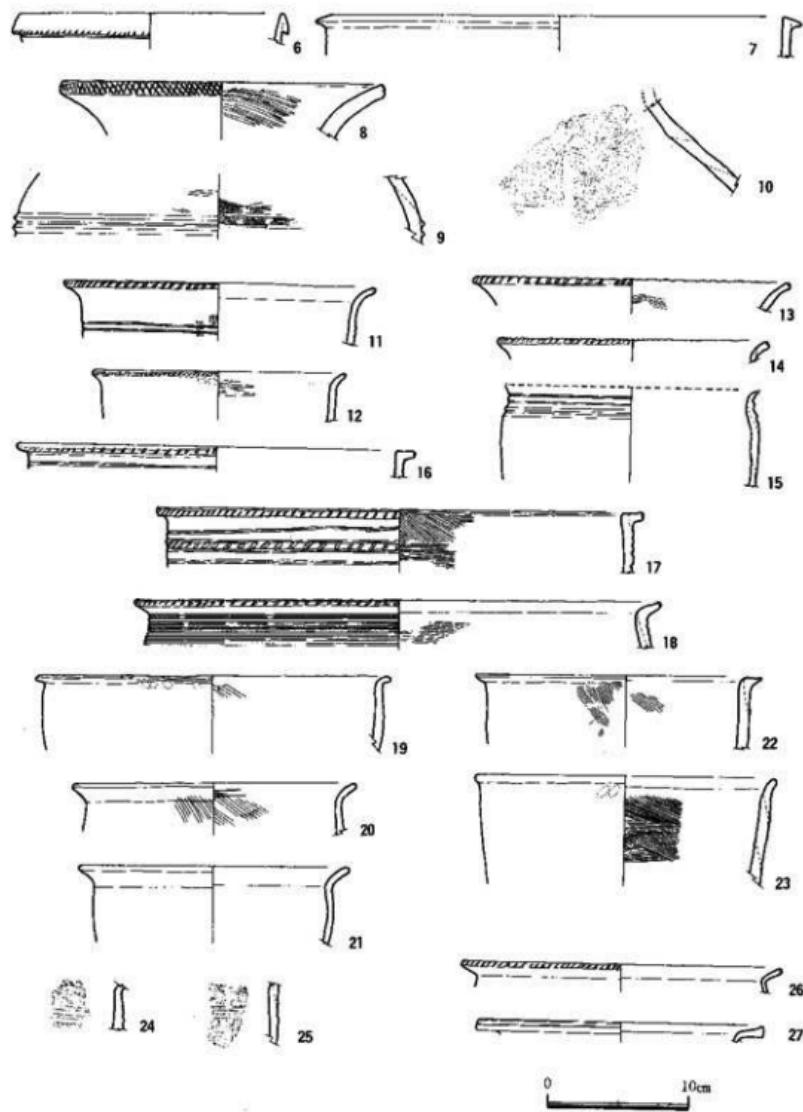
第1トレンチ

山裾部の畠地に設定した4ヶ所のトレンチのうち最も北側に位置する。耕作土下の暗褐色粘質土層(2)黒褐色粘質土層(3)褐色粘質土層(4)が遺物包含層で、この調査地では最も多くの遺物が出土した。遺構は、第4層上面で竪穴住居状遺構1基、浅い円形を呈する土坑状遺構3基が確認された。竪穴住居状遺構は、トレンチの北側隅からその一部を検出したもので、調査用の排水溝によって遺存状態はかならずしも良好とはいえない。柱穴は検出していないが、トレンチ北西壁で住居跡の壁溝を確認することができた。隅丸方形の平面プランを持つ竪穴住居跡と考えられる。この住居状遺構の床面近くから壺、甕、扁平な自然縛が出土している。また、土坑2基からも小片であるが上器が出土している。いずれの遺構も出土遺物から、弥生時代後期の所産になるものと考えられる。

第1トレンチから出土した上器の大半は、包含層からのもので小片が多い。第4図に遺構に伴って出土した土器を示した。1~3は竪穴住居遺構の埋土から出土したものである。1は鉢形の口縁部に綾杉状の刻み目を入れる弥生時代前期から中期にかけての壺口縁部である。2, 3は複合口縁外面に平行沈線を施した壺、甕で弥生時代後期のものである。4, 5は、土坑から出土したものである。4の甕は、3より後出のものである。第5, 6図は包含層から出土した土器で、おまかに

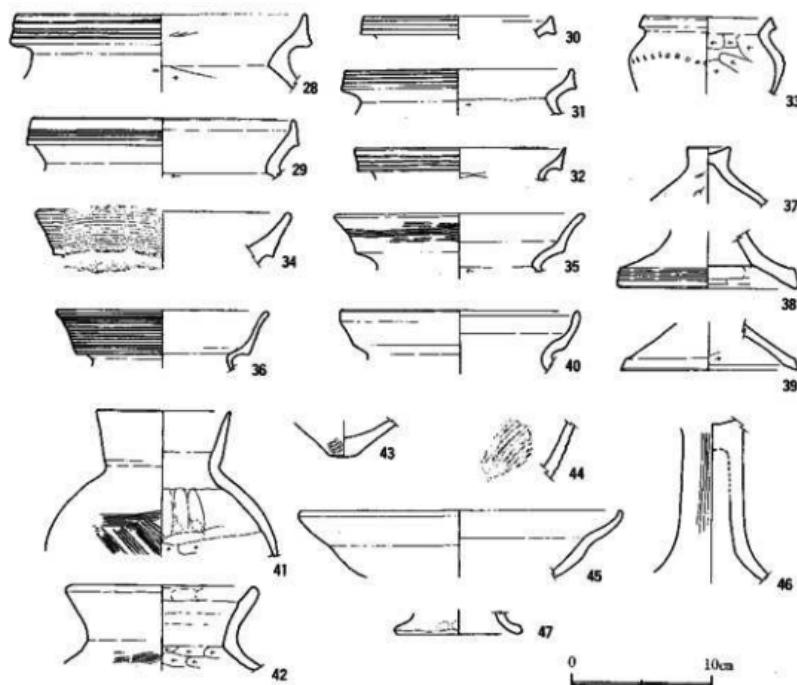


第4図 西大路土居遺跡第1トレンチ出土遺物実測図 (1) 1.2.3竪穴住居状遺構 4.5土坑



第5図 西大路土居遺跡第1トレンチ出土遺物実測図（2）

弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期、古墳時代中期に大別できるが、量的には弥生時代後期の土器が多い。今回報告するにあたっては、前期末～中期初頭の土器を多く図化するようにつとめ、他の土器については代表的なものにとどめた。弥生時代前期末～中期初頭に属すると考えられる土器は、調査面積のわりには多く出土している。壺が主体で、口縁形態を見るとゆるく屈曲するものと鋭角に曲がり逆字形を呈するもの（16, 17, 18, 22）が認められる。口縁部の刻み目や頸部下に沈線を施すものほか無文のものも多い。刻み目は、口縁端面にやや左下向きに施したものが多く、沈線にはヘラ描き沈線と多条のケシ描き沈線（18）がある。17は沈線間に刺突文を入れる。26, 27は中期でも時期の下る壺口縁部である。28～39, 43, 44は弥生時代後期の土器で、壺のほか蓋、高杯がある。壺はいずれも複合口縁の外面に平行沈線を施す。43, 44はタタキ目を持つ底部片である。41, 42, 45～47は古墳時代中期の土器である。壺、壺、高杯、低脚杯、鉢などの器種が認められる。なお、図化していないが古墳時代前期の上器片もわずかに出土している。第5図の6, 7は、口縁端部に断面三角形の突帯を貼付する縄文時代晚期の突帯文土器ないしはその系譜につながる土



第6図 西大路土居遺跡第1トレンチ出土遺物実測図（3）

器と考えられる。6は突帯の頂部に細かい刻み目を入れる。いずれも小片で細かい調整技法などは不明である。

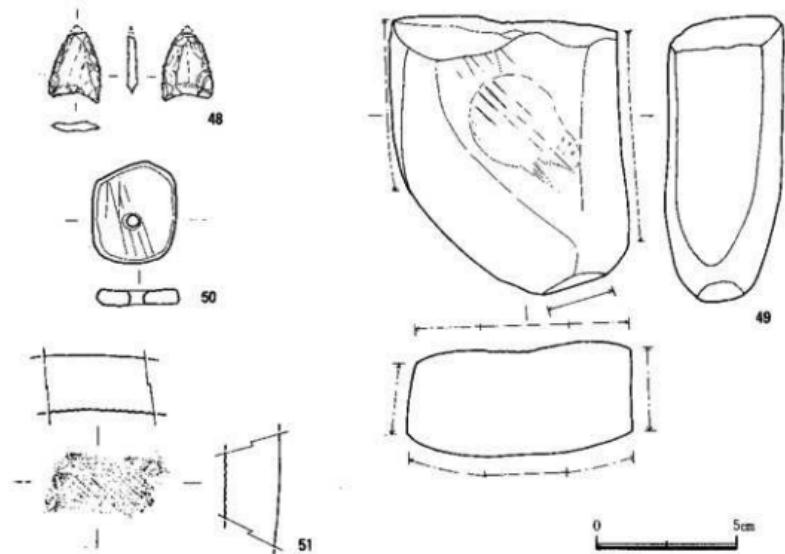
第1トレンチからは、土器のほか第7図に示した石鎌、砥石、土製紡錘車、用途不明の土製品が出土している。50の紡錘車は土器片を利用したものである。51の不明土製品とした遺物は、一辺4cm、厚さ2mm余り小片であるが、わずかに湾曲した内面にハケ状工具による文様状の陰刻が認められる。外面は淡橙色、内面は淡褐色を呈する。

第2トレンチ

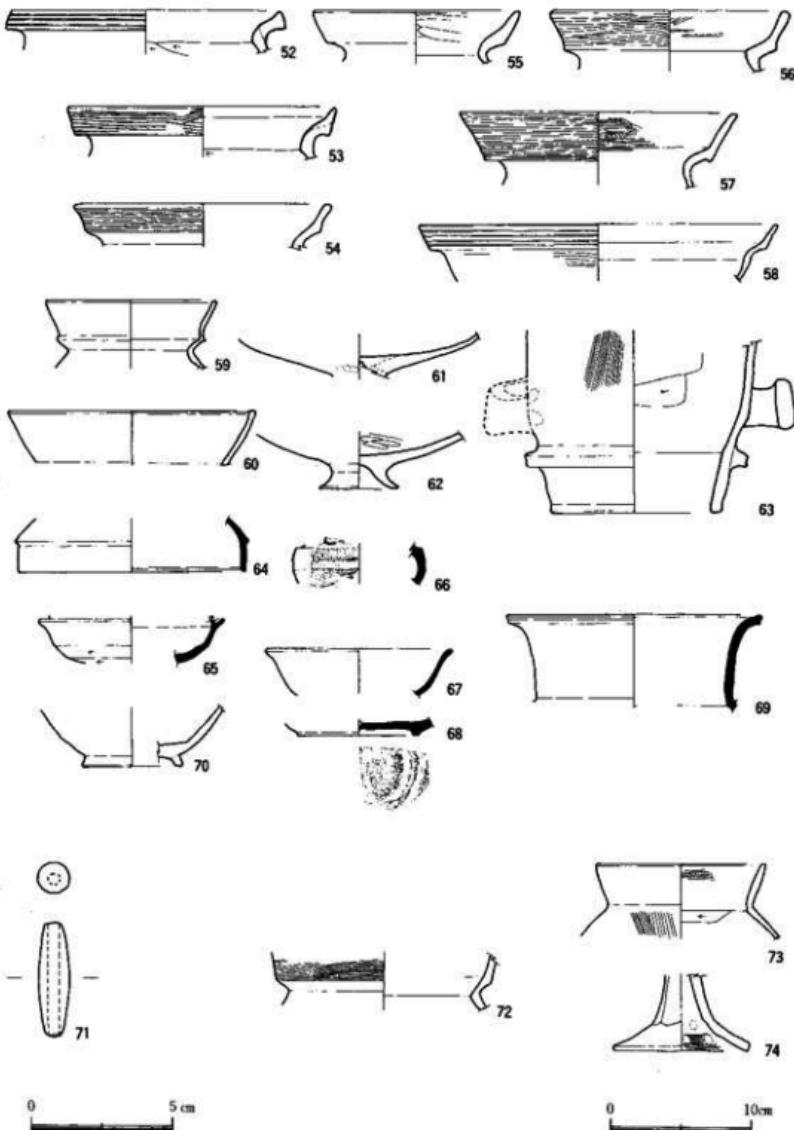
第1トレンチの西南西約25mに位置し、山裾部に設定したトレンチの中では最も低位置に設定したトレンチである。

調査時にはほとんどの耕作土が取り去られていたが、耕作土下の褐色粘質土層（3）と暗褐色粘質土層（4）が遺物包含層である。第4層下の礫を密に含む褐色粘質土層（5）の上面から溝状遺構2基、土坑状及び柱穴状の遺構6基を検出したが、トレンチが面積狭小であるため明確な遺構の時期、性格は認知しえなかった。

遺物は、両包含層中に各時期のものが混在して出土している。このため、包含層と各時代の対応関係は不明である。このトレンチからは、糸切り底を持つ杯、古墳時代の土器片、および弥生時代



第7図 西大路土居跡第1トレンチ出土遺物実測図（4）



第8図 西大路土居遺跡第2.3.4トレンチ出土遺物実測図
52-71第2トレンチ, 72第3トレンチ, 73,74第4トレンチ土坑

後期の土器片も出土している。

52～57は弥生時代後期の壺口縁部である。58は、同時期の鉢であろう。59～63は古墳時代前期の土器である。壺には複合口縁のものと、くの字口縁を呈するものがある。63はいわゆる瓶形土器である。64～66は、古墳時代の須恵器である。糸切り底を持つ杯は土師質のものと須恵質のものが認められる。

第3トレンチ

第1トレンチの南東約15mで、各トレンチの中で最も標高の高い位置に設置したトレンチである。耕作土下の暗褐色土層（2）が遺物包含層で、この上面から土坑状遺構1基、段状遺構1基が検出された。比較的新しい時代の遺構と考えられる。

遺物の量は山裾部の畠地に設定したトレンチの中では最も少ないが、時期としては古墳時代中期から弥生時代後半の上器片が出上している。

第4トレンチ

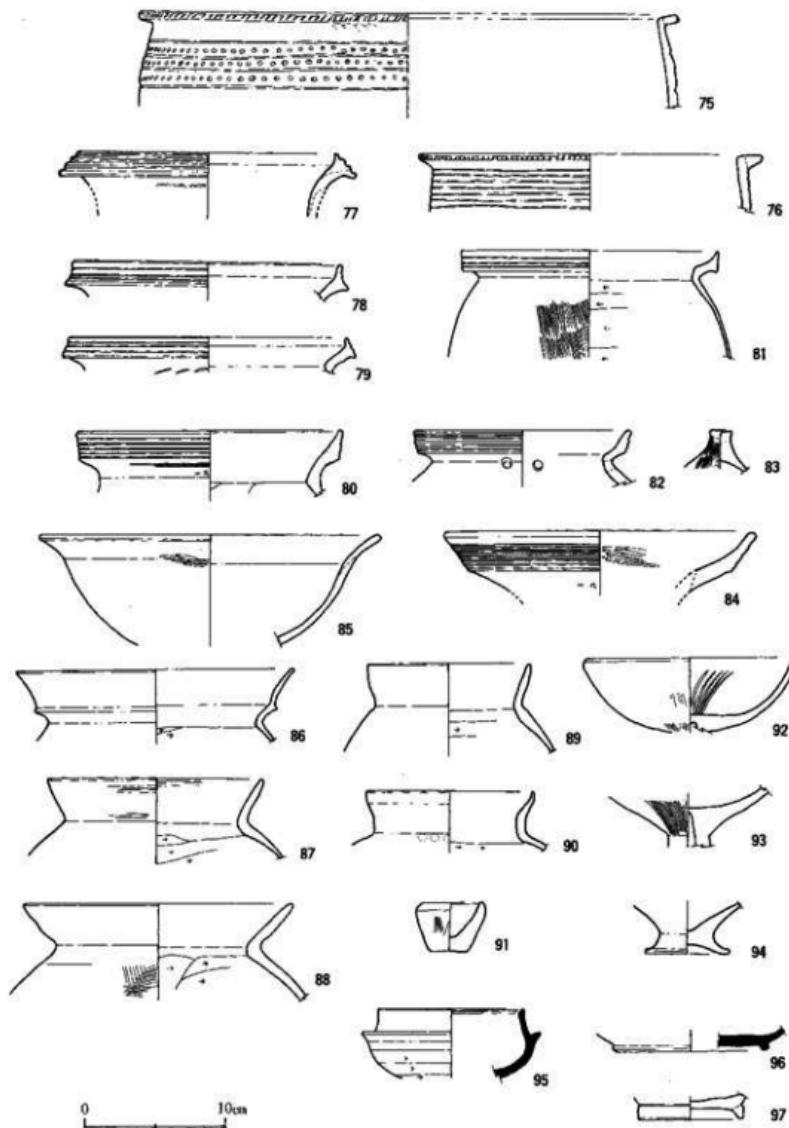
第1トレンチの南側約20mで、一段高くなった畠地に位置する。耕作土下の明褐色粘質土層（2）褐色粘質土層（3）暗褐色粘質土層（4）が遺物包含層で、この調査地内では第1トレンチに次いで多くの遺物が出土している。

第2層上面および黒褐色粘質土層（5）からトレンチ壁面の観察によって柱穴状遺構が検出された。また、第4層上面から土坑状遺構1基が検出され、壺1点、高杯2点が出上した。

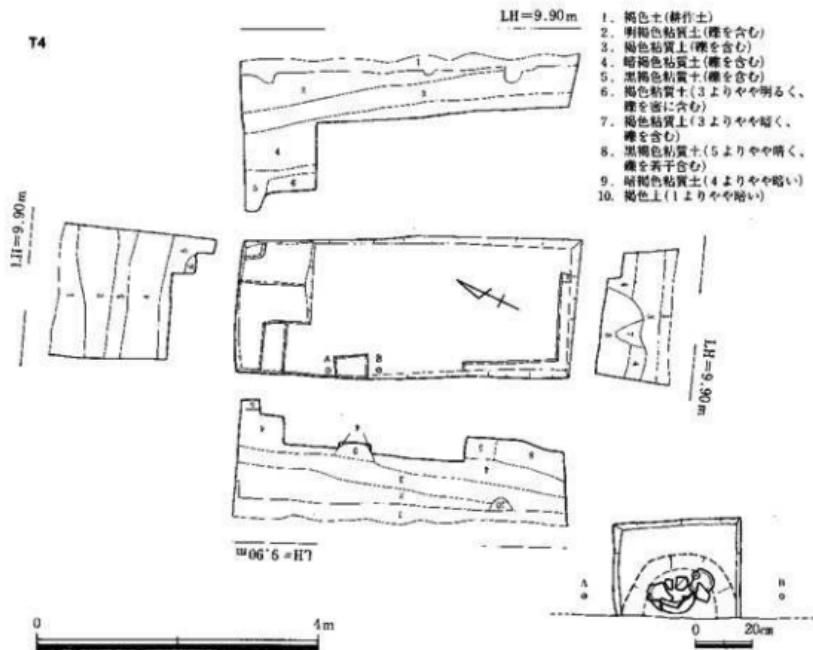
出土した遺物は、歴史時代のものから弥生時代前期に属するものまでまんべんなく出土している。75,76は、弥生時代前期末から中期初めにかけての壺である。いずれも逆L字口縁の罐部に刺み目を入れる。75は、頸部下に4条のヘラ描き沈線間に刺突文を入れている。76は、多条化したヘラ描き沈線を頸部下に施す。77～85は、弥生時代後期の土器である。器種には壺（77）、壺（78～82）、盞（83）、高杯（85）、器台（84）がある。86は古墳時代前期の壺である。87～90は、古墳時代中期から後期にかけての壺である。土坑状遺構から出土した壺もこの時期のものである。92,93は、赤彩された高杯である。95は、比較的古い須恵器の杯身である。このほか、高台の付いた杯（96,97）も出土している。

第5トレンチ

第1トレンチの西側約100mの水田部に設定したトレンチである。以前のは場整備による約50cmの客土層の下層は自然堆積層で淡黒灰色粘土層（3）、灰色粘土層（4）、黒灰色粘土層（5）へと続いている。遺構、遺物ともに認められなかった。



第9図 西大路土居遺跡第4トレンチ出土遺物実測図



第10図 西大路土居遺跡第4トレンチ平面・断面実測図及び遺物出土状態実測図

III 宮長竹ヶ鼻遺跡

1. 遺跡の位置と周辺の遺跡

宮長竹ヶ鼻遺跡は、JR鳥取駅から南へ約2km、西大路土居遺跡からは西へ約1.5kmの位置に所在する。西大路土居遺跡と同様に国道29号バイパス予定地内の分布踏査によって発見された遺跡である。周辺は、鳥取市内でも有数の水田地帯であったが、工業団地等の造成後市街化が進行している。

宮長周辺には、これまで周知の遺跡は知られていなかった。今回の調査を契機として、地域の人々からの情報も寄せられ新たな遺物散布地を確認することができた。今回の調査地の南側200mの宮長字上宝殿に現在でも周辺よりやや高くなっている、畑地として利用されている所がある。鳥取家具工業の裏手にあたる。伝承では寺院があったといわれ、かなりの密度で須恵器、土師器片が散布している。地元の人の話では、玉類も採集したことがあるとのことである。第12図に採集した古墳時代後期の須恵器杯を掲げておく。高台の付くものも認められる。この字上宝殿と今回調査した字竹ヶ鼻の間にも土師片の散布を見ることができ、一体の遺跡としてとらえることもできよう。字上宝殿地区のほか字下宝殿地区からも土器が出土するとの情報を得たが、今回の調査では明確にすることができなかった。ほぼ第9、10トレンチによって調査したあたりである。

鳥取市南部の概略的な遺跡分布については、西大路上居遺跡の項を参照していただきたい。

2. 発掘調査の概要

遺跡の拡がりを想定して、県道八坂・鳥取停車場線の東側の的場地区に第1～3トレンチ、西側の宮長地区に第4～10トレンチを設定した。調査地内の制約により $2\text{ m} \times 5\text{ m}$, $4\text{ m} \times 5\text{ m}$, $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ のトレンチをそれぞれ設定し、調査総面積は 215 m^2 となった。

的場地区は標高7mほどの開けた水田地帯である。宮長地区も同様であるが、地形的には西側の標高5.5m強の低地と東側の標高6～7mの微高地とに分かれる。トレンチは、的場地区の東端から順次番号を付した。

第1トレンチ

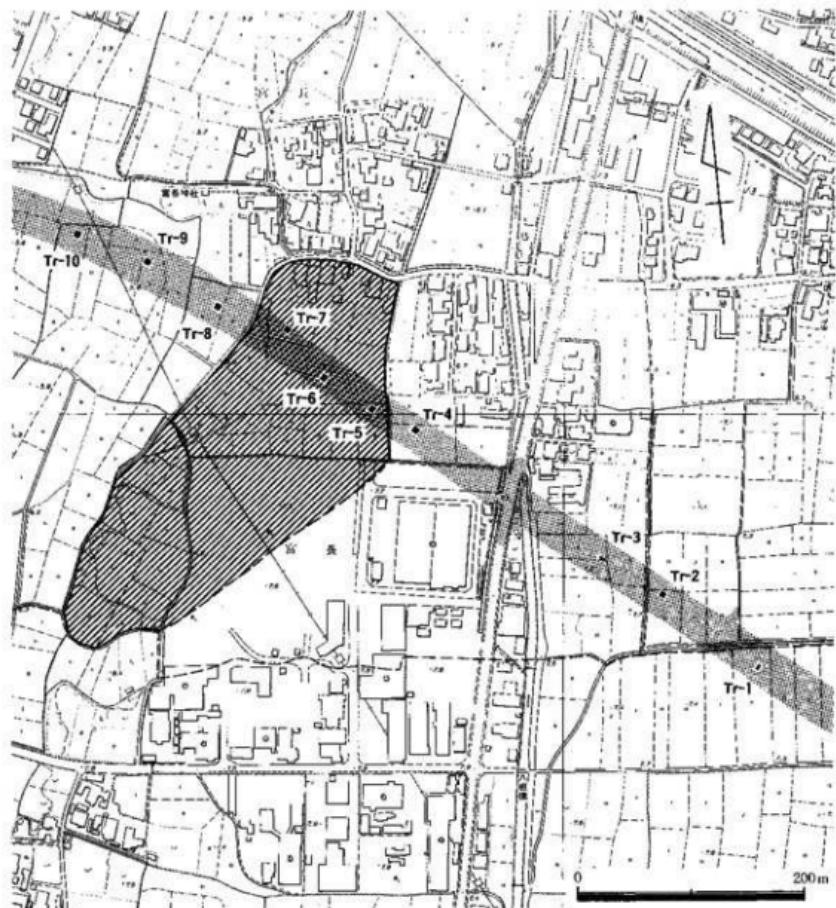
調査地の最南東部に位置する。耕作下に現水田用の暗渠があるほか整った堆積が続き、約55～60cmで粘土層となる。遺物は灰褐色粘質土層(3)から中世のものと考えられる須恵質土器と土錐が出土した。遺構は検出されなかった。

第2トレンチ

第1トレンチの北西約105mに位置する。耕作下に現水田用の暗渠があるほか整った堆積が続き、約65cmで粘土層となる。時期不明の砾石(第15図11)が1点出土したほかは遺物包含層、遺構とともに確認できなかった。

第3トレンチ

第2トレンチの北西約60mに位置する。耕作土下に現水田用の暗渠があるほかは整った堆積が続き、約65cm~70cmで粘土層となる。遺構は灰褐色粘質土層(12)から掘り込まれるピット1基をトレンチ壁画の観察によって検出した。またトレンチをほぼ東西に横断する灰褐色粘質土層(3)から掘り込まれる溝状遺構1基を検出した。このトレンチからは全く遺物は出土しておらず両遺構ともその性格や時期は不明である。土層の堆積状況、遺構の形態からすれば新しいものであろう。



第11図 宮長竹ヶ鼻遺跡調査地内トレンチ配置図(網は道路予定地、斜線は遺物散布地)

第4トレンチ

宮長地区のトレンチの最南東部で第3トレンチの北西約200mに位置する。耕作上はすでにそのかなりの量が取り去られていたが、耕作土下に現水田用の暗渠があるほかは整った堆積が続き約75cmで粘土層となる。遺物は明灰褐色粘質土層（6）の上面から中世の土鍋片（第15図1）が出土した。ほかには時期不明の須恵器片が1点出土した。遺構は検出されなかった。

第5トレンチ

第4トレンチの北西約40mに位置する。耕作土下に現水田用の暗渠が密に錯綜するほかは比較的整った堆積で、約85~95cmで粘土層となる。粘土中には明緑灰色粘土層（12）と黒灰色粘土層（14）との間および緑灰色粘土層（15）と暗黒灰色粘土層（17）との間にそれぞれ5mm程度の植物遺体層（13, 16）が検出された。

耕作土下の第2層から、古代~中世にかけての須恵器、土鍋、備前焼すり鉢など（第15図2~6）と土鍤（第15図12, 15）が出土した。遺構は検出されなかった。

第6トレンチ

第5トレンチの北西約50mに位置する。耕作土下に現水田用の暗渠が掘り込まれている。この暗渠に重なっているがわずかにずれる溝状遺構（SD-01）が検出された。さらにこのSD-01と約40度の角度で交差する旧水田用と考えられる溝状遺構（SD-02）を検出した。また同様に耕作土下で柱穴2基を検出した。このトレンチの土層も比較的整った堆積が続き、耕作土下約25~35cmで基盤層と考えられるよくしまった暗褐色粘質土層（7）が現れる。

遺物はSD-01の上面から古代から中世にかけての須恵器片および土師質の羽釜が出土し、また柱穴の中から同時期の須恵器片が出土した（第15図7~10, 14）。

第7トレンチ

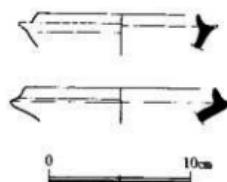
第6トレンチの北西約50mに位置する。耕作土下に現水田用の暗渠が掘り込まれている。明黄褐色粘質土層（2）上面で柱穴9基を検出し、また暗黄褐色粘質土層（3）上面でも柱穴を9基検出した。しかしながら、明確に建物規模を想定するにはいたらなかった。

遺物は両遺構面および一部の柱穴内から古代から中世にかけての土師質土器や須恵器片が出土した。

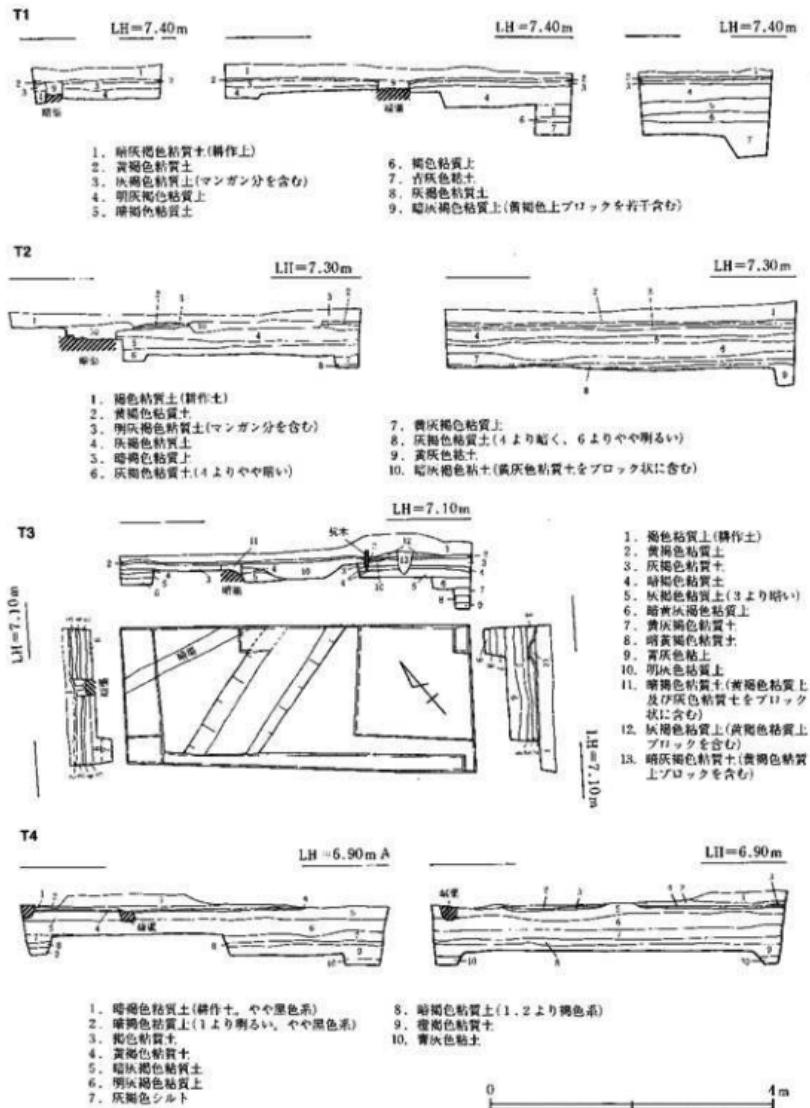
第8トレンチ

第7トレンチの北西約60mに位置する。耕作土下に現水田用の暗渠が掘り込まれているほかは整った堆積で、約50~60cmで粘土層となる。

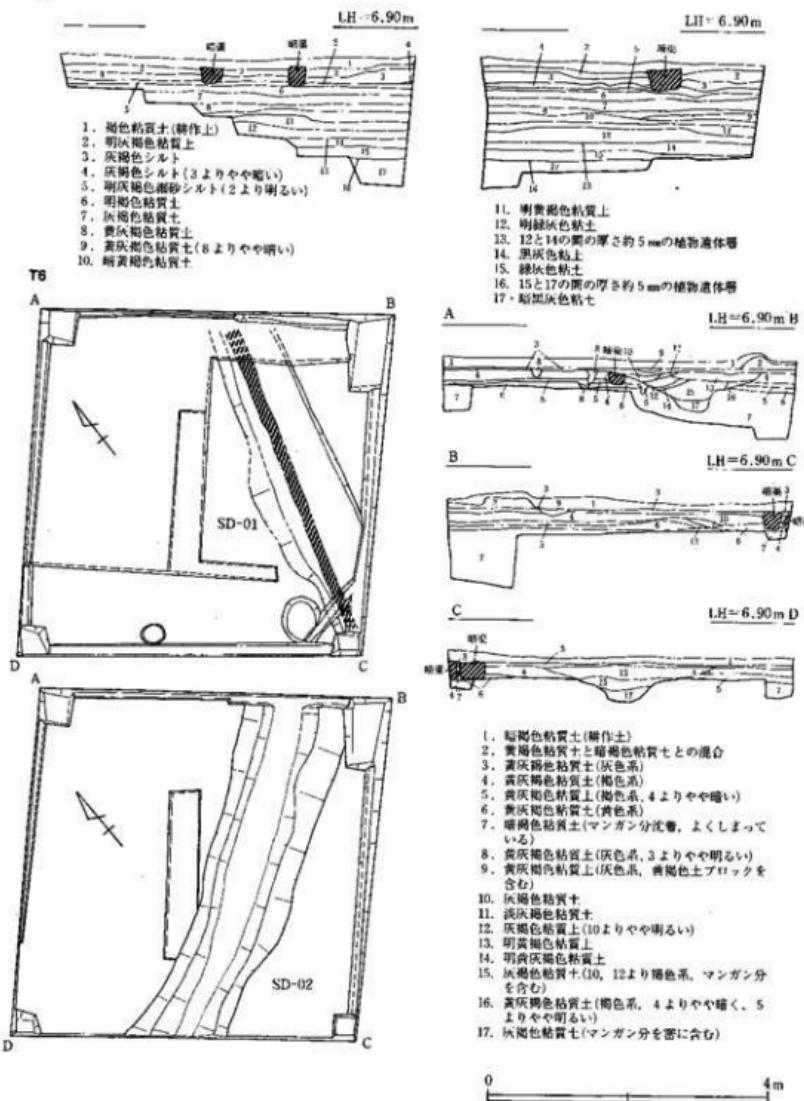
遺物は土師器片とともに近世・近代の陶磁器片がわずかに出土した。



第12図 宮長字上宝殿採集遺物実測図



第13図 宮長竹ヶ鼻遺跡第1, 2, 3, 4トレンチ平面・断面実測図

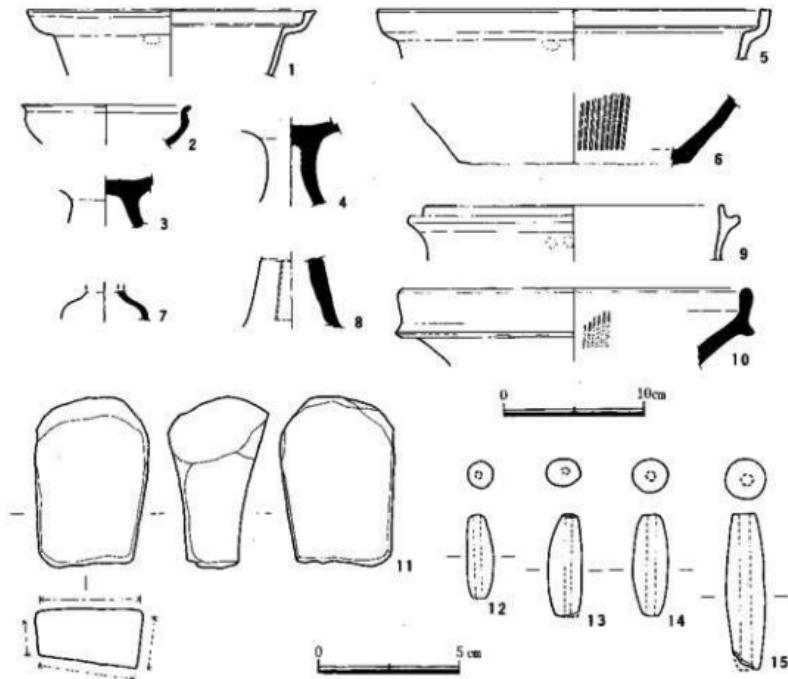


第14図 宮長竹ヶ鼻遺跡第5, 6トレンチ平面・断面実測図

第9トレンチ

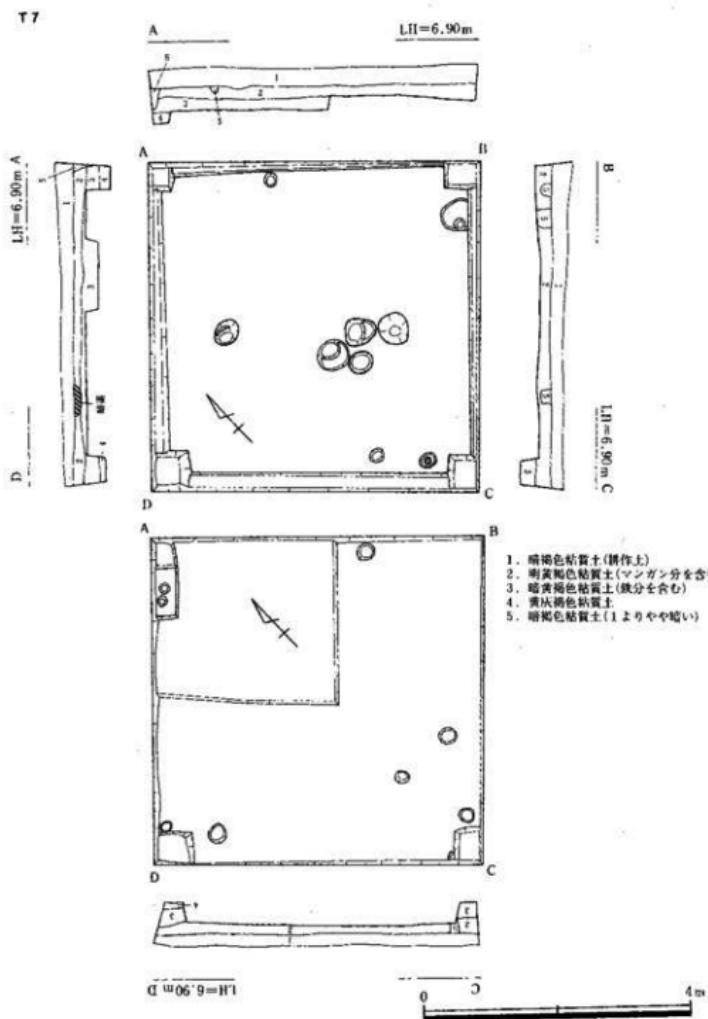
第8トレンチの北西約70mで、旧湿地帯に位置する最低位のトレンチである。灰褐色粘質土層(7)の上面から時期不明の暗渠が掘り込まれているほかは約4~10cmの薄い層が整って堆積し、耕作土下約30~40cmで明灰褐色細砂シルト層(10)となり、褐色粘質土層(11)、明褐色砂層(12)へと続く。

遺物としては詳細不明の鉄製品のほか古代から近世・近代にかけての土師質土器片、須恵器片、綠釉陶器片、陶磁器片が出土した。いずれも、細片で摩耗している。暗渠以外の遺構は検出されなかった。



第15図 宮長竹ヶ鼻遺跡第1,2,3,4,5,6出土遺物実測図

13第1トレンチ, 11第2トレンチ, 1第4トレンチ, 2,3,4,5,6,12,14,15第5トレンチ,
7,8,9,10,14第6トレンチ



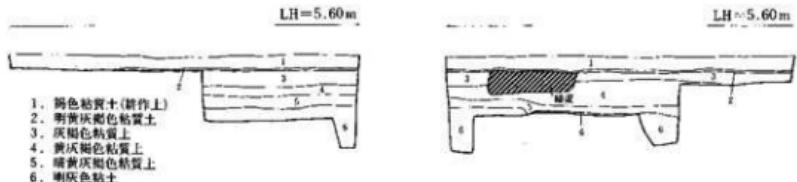
第16図 宮長竹ヶ鼻遺跡第7トレンチ平面・断面実測図（上、上層、下、下層）

第10トレンチ

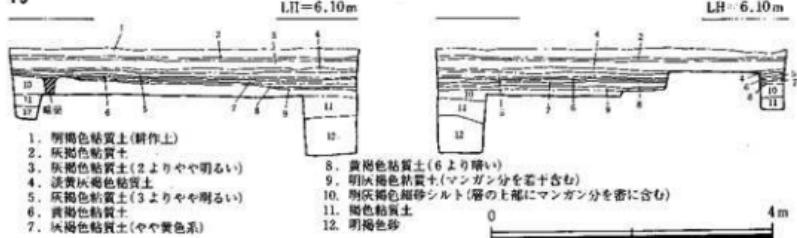
宮長地区の最北西部で、第9トレンチの北西約65mに位置する。耕作土下は約2~10cmの薄い層が整って堆積している。

遺物は古代から近世・近代の須恵器片がわずかに出土しているが、明確な遺構は確認しえなかつた。

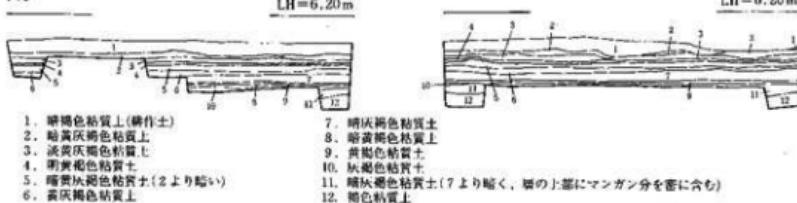
T8



T9



T10



第17図 宮長竹ヶ鼻遺跡第8,9,10トレンチ断面実測図



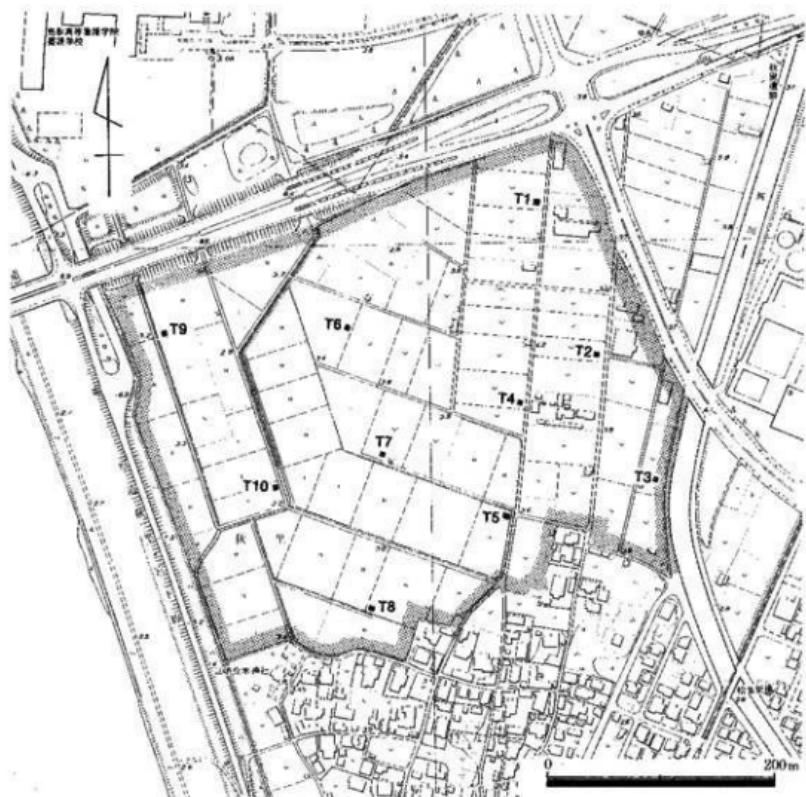
第18図 猿取市秋里周辺遺跡分布図

IV 秋里遺跡

1. 遺跡の位置と周辺の遺跡

秋里遺跡は鳥取市の北部にあり、鳥取駅からは直線距離で約1.5kmほどである。遺跡は、旧千代川左岸に形成された自然堤防上に立地し、秋里、江津両地区にまたがる複合遺跡である。現在は、蔬菜類栽培の畠地として利用されている。

秋里遺跡は、昭和49年6月に河川改修及び国道9号バイパス工事中に発見された。同年12月から始まった発掘調査によって、大量の古式土師器とともに鳥船、船、馬などを模した各種の土製品が出土し、全国にもまれな祭祀遺跡であることが明らかにされた。その後、発掘調査が積み重ねられ、

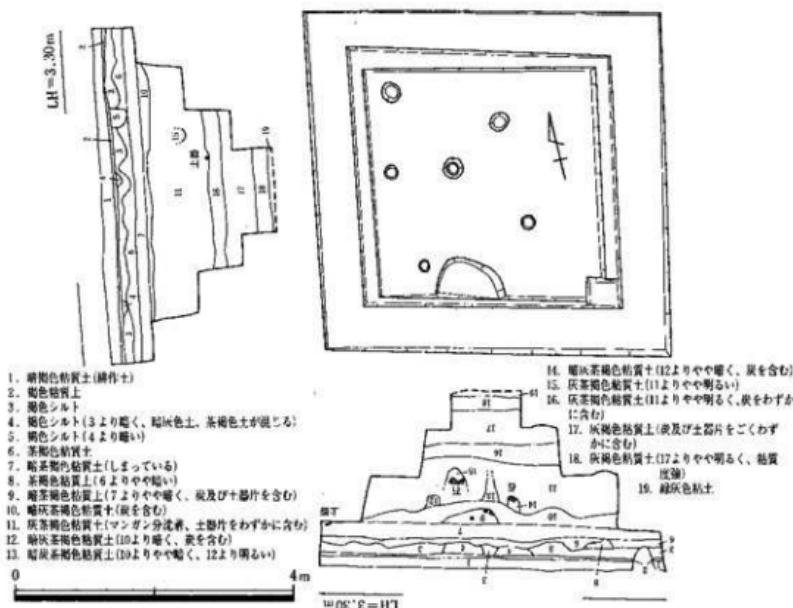


第19図 秋里遺跡トレンチ配置図（網の範囲は調査対象地）

単に古墳時代の祭祀遺跡としてだけではなく弥生時代から中・近世まで続く大複合遺跡と考えられるようになってきた。

周辺の遺跡として、北方の砂丘地内に縄文～古墳時代の遺物散布地である追後遺跡、長者原遺跡が知られている。古墳としては、開地谷古墳群、浜坂横穴群が良く知られている。西方の千代水平野内には、縄文時代晚期後半から始まり古墳時代へと統いて営まれた岩吉遺跡がある。千代川左岸の大集落遺跡と目されており、最近の調査では、水田、水路と共に木廻丁、舟舟、堅杵、刀形木製品、船形木製品など、弥生時代後期及び古墳時代の農富な木製品が出土して注目を集めた。

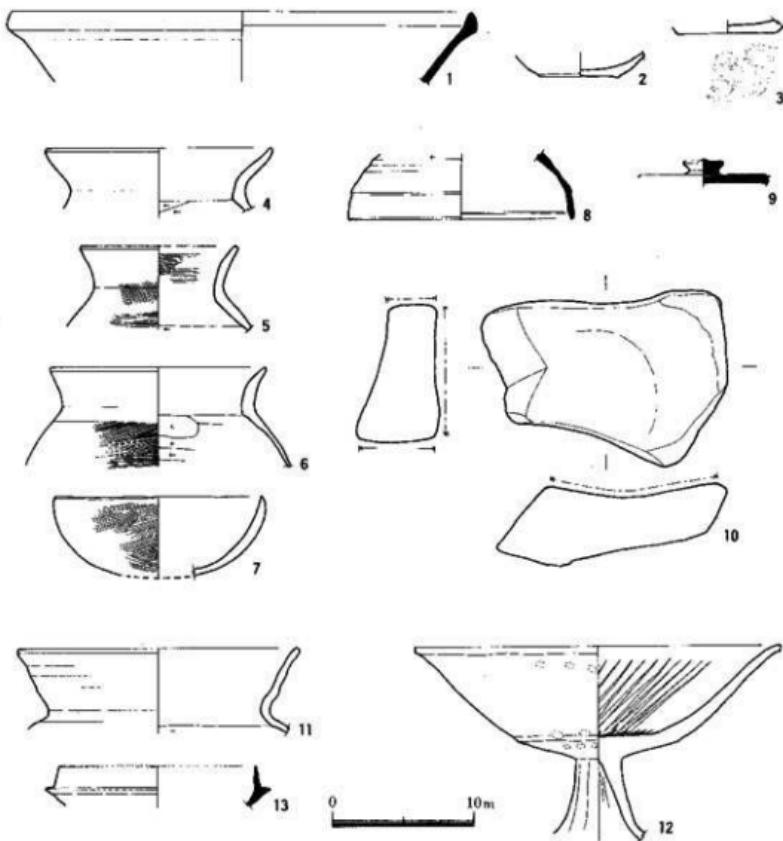
秋里遺跡の東北端は三嶋の戸と呼ばれ、宗像三女神を祭神とする三嶋社の小さな祠がある。この三嶋社は、因幡国司の初任の際に参拝した神社として平安時代の文献にも記されている。また、中世には「三嶋社」と呼ばれる集落、神宮寺もあったことが後出の文献によって知ることができる。戦国時代には、羽柴秀吉の鳥取城攻の際の陣所が構えられたとの記録があり、現在の鳥取衛生公社敷地内には上塙も残されている。



第20図 秋里遺跡第1トレンチ平面・断面実測図

2. 発掘調査の概要

調査地は、標高2.5~3.6mの耕作地帯に位置している。調査地全域に5m×5mあるいは4m×4mのトレンチを10ヶ所設定した。これまでの秋里遺跡の発掘調査から深いところで3mは掘削する必要があると考えられ、トレンチ壁画の崩壊が予想された。このため安全を期し、各トレンチとも遺構面あるいは層序の変化する面で掘り下げ枠を縮小し、階段状に掘り下がっていった。このため、各トレンチの断面図は、階段状の各壁面を同一方向ごとに合成したものである。今回の秋里遺跡の

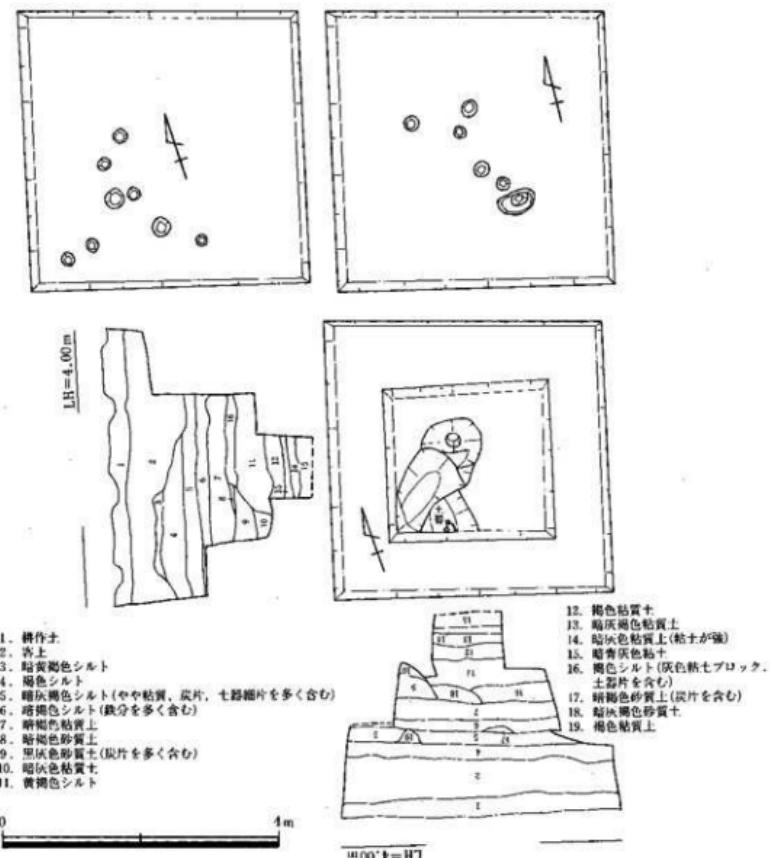


第21図 秋里遺跡第1, 2トレンチ出土遺物実測図
1~3 第1トレンチ 4~10 第2トレンチ溝状遺構, 11~13 第2トレンチ土坑

発掘調査地の字名は、東皆竹、村下、皆竹畑、瀬戸田、松下の5ヶ所にわたる。

第1トレンチ

調査地の最北東部で国道9号鳥取バイパス中央病院交差点点の南西約70mに位置する。耕作下土約2.2mで緑灰色粘土層(19)となる。トレンチ壁面の観察から褐色シルト層(3)の上面から掘り込まれるピット状造構を検出したが、性格など詳細は不明である。また、暗灰茶褐色粘質土層(10)および第11層上面から中世のものと考えられる土坑1基および柱穴状造構6基を検出したが、建物規模を想定するには至らなかった。



第22図 秋里遺跡第2トレンチ平面・断面実測図(平面図左上層造構面、右上中層造構面、下下層造構面)

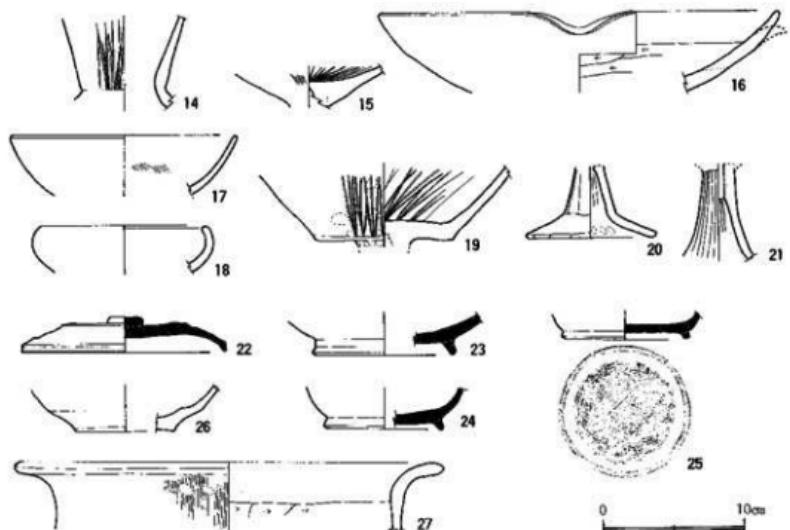
遺物は土坑の内部から白磁細片 1 点が出土したほか、中世遺構面である第10および第11層上面から糸切り底の杯（第21図 2, 3）や須恵質の鉢（第21図 1）などの中世土器片、少量の古墳時代後期の土師器片が出土した。

第2トレンチ

第1トレンチの南々東約140mに位置し、この調査地内では最も多く遺物が出土したトレンチである。耕作土下に客土があり、その下1.9~2.3mで暗青灰色粘土層（15）となる。その間に4面の遺構面を検出した。

第1面は褐色シルト層（4）上面で、近世または中世の浅い上塙を検出した。この土壤からは木炭片とともに少量の骨片が出土した。第2面は暗灰色シルト層（5）上面で、中世の柱穴 8 基を検出したが、建物規模を想定するには至らなかった。第3面は暗褐色粘質土層（7）上面で、奈良時代から平安時代と考えられる柱穴状遺構 6 基を検出したが、明確に建物を想定するには至らなかった。須恵器片および土師器片が出土している。第4面は褐色シルト層（16）上面で、古墳時代後期の土坑 2 基と溝状遺構 1 基を検出した。須恵器片および土師器片が出土している。

第21図 4~10は、溝状遺構から出土した遺物である。土師器と須恵器が出土している。10は、砥石である。11~13は、土坑から出土した土器で、12の有段の高杯は赤彩した後内面に放射状の暗文を施している。いずれも古墳時代に位置付けられる。このほか第23図に示した土器が出土している。



第23図 秋里遺跡第2トレンチ出土遺物実測図

第3トレンチ

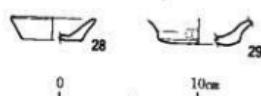
第2トレンチの南南東約120mで狐川のすぐ西に位置する。耕作土下に近年の谷土層(2, 3)があり、その下に旧耕作土層である暗褐色シルト層(4)がある。暗褐色シルト層(8)上面から中世のものと考えられる深さ約1mのピット状遺構を検出したがその性格は不明である。トレンチ掘り下げ中に中世の土師質土器片(第24図28, 29)が出土した。

第4トレンチ

第2トレンチの南西約80mに位置する。耕作上下約2.4mで砂層となり、さらに粘土層へと続く。耕作土から砂層までの間に3面の遺構面を検出した。

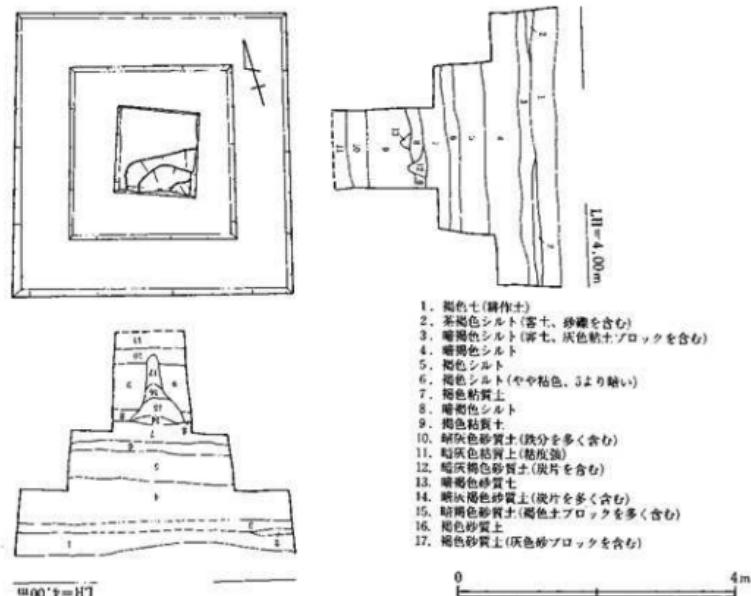
第1面は、灰褐色粘質土層(6)上面で中世の土坑ないし柱穴状遺構2基を検出した。第2面は、灰褐色粘質土層(10)上面で奈良時代から平安時代のものと考えられる柱穴状遺構5基を検出した。

第3面は暗灰褐色粘質土層(13)上面で、柱穴状遺構を検出した。しかしながら、各遺構面から検出



第24図

秋里遺跡第3トレンチ出土遺物実測図



第25図 秋里遺跡第3トレンチ平面・断面実測図

した柱穴状造構からは、明確に建物の構造規模を想定するには至らなかった。

トレンチ掘り下げ中に弥生時代から中世までの各種の土器が出土した。第27図の30から50までが第4トレンチから出土した土器を図化したものである。量的には古墳時代後期から奈良・平安時代の土器が多い。このトレンチで注目されるのは、32の甕胴部下半の土器で、内面をハケ目調整した後へラ磨きしており弥生時代中期まで遡ると考えられる。このほか後期の窓口縁部(30)も出土している。

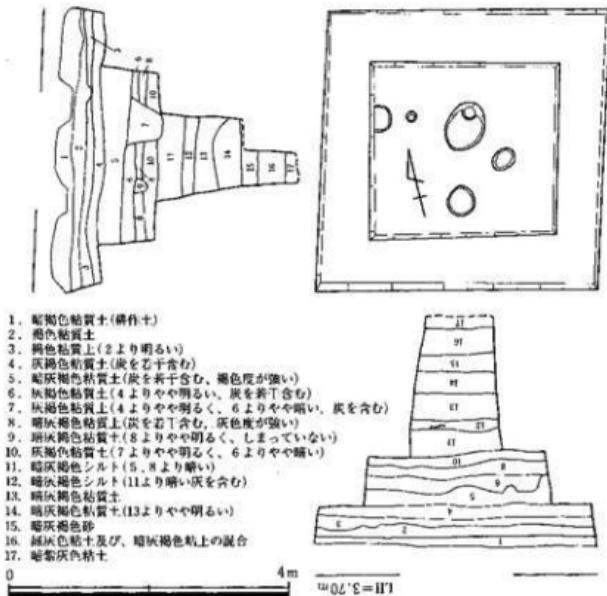
第5トレンチ

第4トレンチの南約100mに位置する。耕作土下約1.5mで灰色粘土層(8)となり、青灰色粘土層(9)、青灰色砂層(10)へと続く。

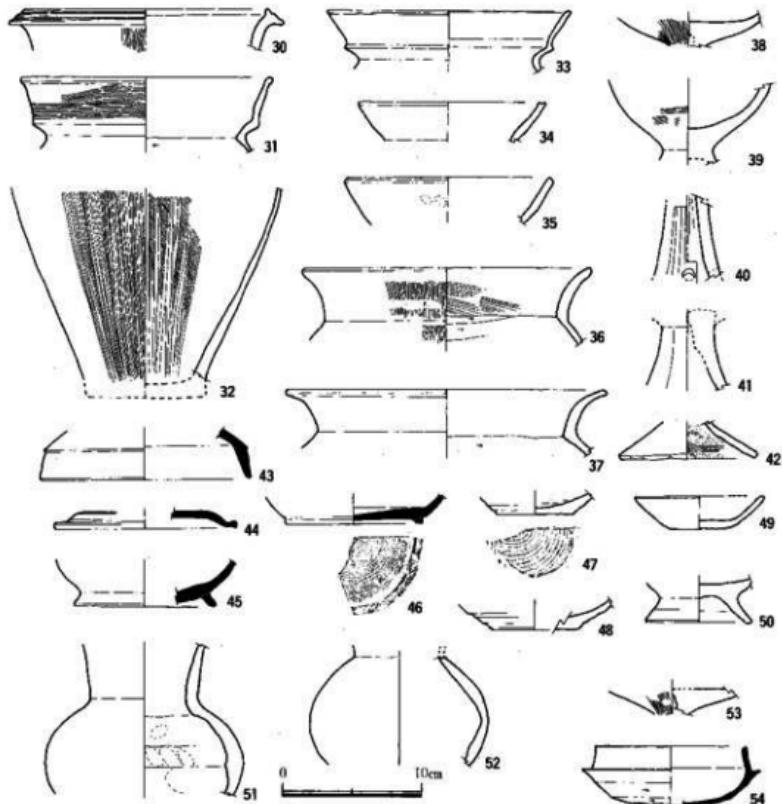
灰褐色シルト層(4)が遺物包含層で、ごく小量かつ細片となった土師器、須恵器が出土した。遺構は検出されなかった。

第6トレンチ

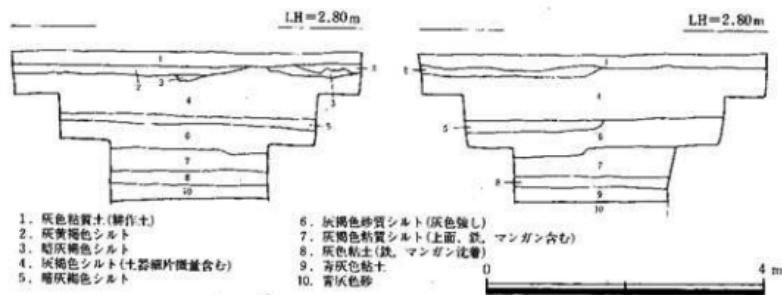
第1トレンチの南西約200mに位置する。耕作土下約2mで砂層に至る。暗灰色砂層(7)中か



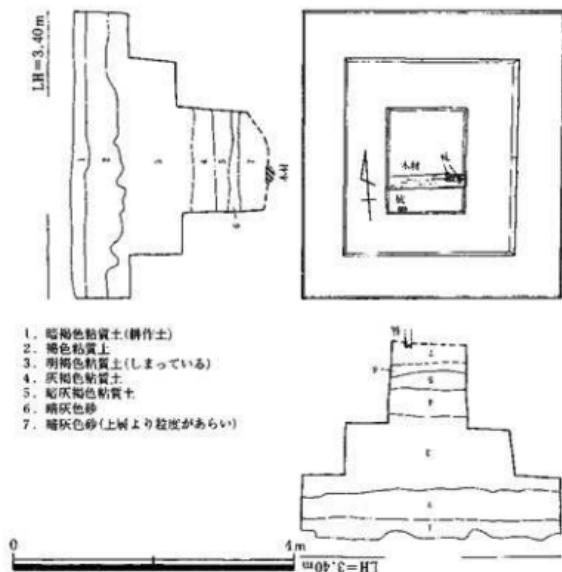
第26図 秋里遺跡第4トレンチ平面・断面実測図(平面図は中層造構面)



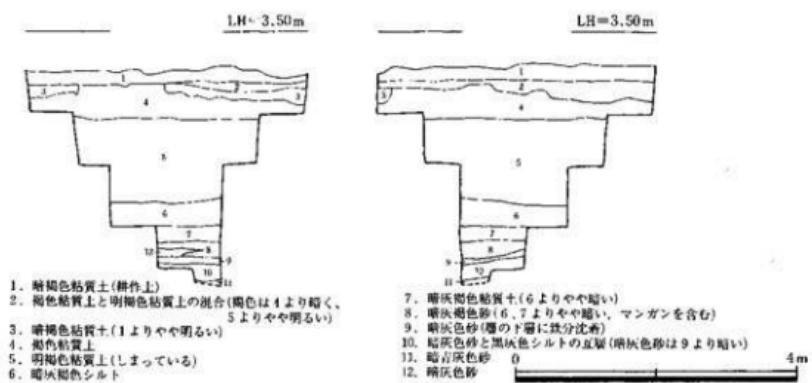
第27図 秋里遺跡第4, 6トレンチ出土遺物実測図 30~50第4トレンチ, 51~54第6トレンチ



第28図 秋里遺跡第5トレンチ断面実測図



第29図 秋里遺跡第6トレンチ平面・断面実測図



第30図 秋里遺跡第7トレンチ断面実測図

ら古墳時代後期の須恵器、土師器とともに木組造構が検出された。直径20cm程度の丸材を断面がカマボコ状になるように縦割りにし、平らな面を上に、山部が下になるように据えつけ、さらに一部をくり抜いて2本の丸木杭を打ち込んで固定している。またこの木材の南側25cmから出土した杭は角材である。水路・溝などに関連する造構であろう。これらの木材、杭木のほかには明確な造構は検出されなかった。

この木組造構から出土した土器は古墳時代後期のもので、土師器の壺、高杯、須恵器杯がある（第27図51～54）。

第7トレンチ

第6トレンチの南約110mに位置する。耕作土および褐色粘質土層（2）下に擾乱土層である暗褐色粘質土層（3）があるほかは比較的整った堆積で、耕作土下2.3mで砂層に至る。

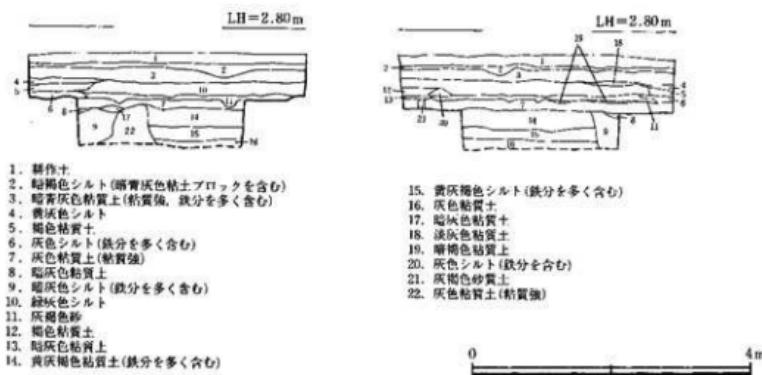
遺物は中世の土鍋の細片が出土したが、造構は検出されなかった。

第8トレンチ

第7トレンチの南約135mに位置する。耕作土下約60cmまでは比較的整った堆積が続くが、それ以下には灰色粘質土層（22）といった噴き出し状の層序が見られる。黄灰色粘質土層（14）上面から時期不明の土坑状造構6基が検出されたが、自然堆積とも考えられる。なお遺物はごくわずかの土師器片が出土している。

第9トレンチ

第6トレンチの西約160mに位置する。耕作土下は整った堆積が続き、約1.5mで、灰色粘土層（8）に至る。暗褐色シルト層（4）遺物包含層で、弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が少量出土した。灰褐色砂質土層（6）から掘り込まれる土坑状および溝状造構をトレンチ壁面の観察で検出した。



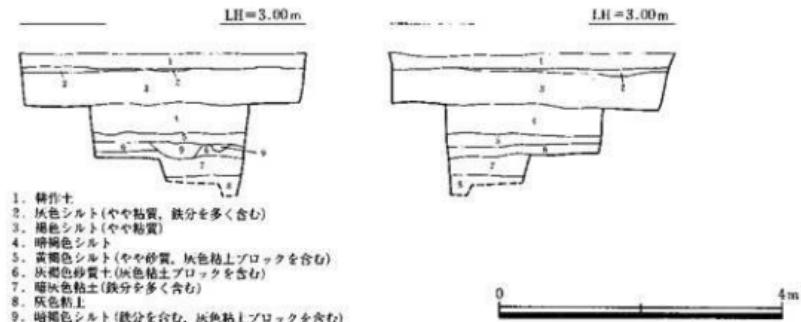
第31図 秋里遺跡第8トレンチ断面実測図

たが、自然堆積の可能性があり、詳細は不明である。

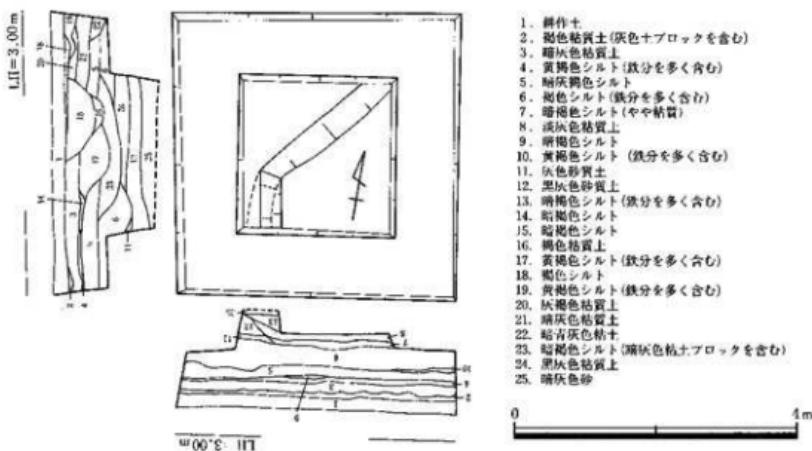
第10トレンチ

第9トレンチの南東約155mに位置する。比較的新しい段階で数度の客土ないし自然堆積があつたらしく、トレンチ壁面の観察によると耕作土下はそのつど掘り込まれたと思われる溝状造構が段々に切り合って検出された。約1.1mで暗灰色砂層(25)に至る。

遺物はごくわずかの須恵器細片が出土した。



第32図 秋里遺跡第9トレンチ断面実測図



第33図 秋里遺跡第10トレンチ平面・断面実測図

V ま と め

1. 西大路遺跡

西大路土居遺跡における今回の調査では、総面積50m²という狭い範囲にもかかわらず、各時代各種の遺物が大量に出上した。特に弥生時代前期末～中期初頭にかけての遺物は、鳥取市内でも出土例が少ないだけに貴重である。今後の調査に期待したい。

遺構はそれぞれ古墳時代中期、弥生時代後期の遺物を伴った堅穴住居状遺構や土坑状遺構が検出されたが、試掘調査のためそれらの個々の規模、性格などについては十分に把握しきれなかった。しかしながらこれらの遺構や遺物はこの調査地内に弥生時代前期から古墳時代中期にいたる集落が存在することを十二分に示唆するものである。また遺構とともに出土ではないものの歴史時代の遺物も多量に出土しており、この調査地内に歴史時代の遺構が存在しうることも示唆していると言えよう。火路山南側台地にも既知の遺物散布地が所在している。今回の調査地との間は集落が張りついているが、この集落の立地する台地状の微高地にも遺跡は拡がっているものと思われる。

2. 宮長竹ヶ鼻遺跡

宮長竹ヶ鼻遺跡における今回の調査では、的場地区では出土遺物との相関関係が明白でかつその性格が明確な遺構を検出することはできなかった。しかし宮長地区では地下における遺物の分布や種類といった遺跡の性格をある程度知ることができた。以下、若干の検討を加えながら調査結果をまとめてみたい。

(1) 的場地区

この地区では第1、第2トレンチにおいてごくわずかな遺物が出上したが、いずれも耕作等の影響を受けやすい土層からの出土で、明確な遺物包含層からの出土とは考え難い。

調査面積が狭いためこの地域に全く遺跡がないとはい難いものの、現段階では調査地区に遺跡が存在する可能性は極めて薄いものと考えられる。

(2) 宮長地区

地区的古老から最近の耕地整理は受けていないこと、調査地の西側の低地は近世・近代まで湿地帯であったらしいとの話を聞いていたため、当初から微高地について遺構を予想して調査を行なった。その結果、微高地に設定した第4、第5、第6、第7の各トレンチから中世あるいは平安時代から中世にかけての土器片や陶磁器片が出土した。これらのトレンチからは明確な遺物包含層は確認しえなかつものの第6および第7トレンチの遺物は遺構面、遺構内からの出土であり検出遺構に伴うものであると判断できる。時期としては中世に主体があるものと思われる。ただし第4トレンチについては他のトレンチに比べて遺物の量が少なく、第5トレンチとの間には用水路が走っており耕地整理のことなどと考えあわせると遺跡範囲から外れると思われる。

低地に設定した第8、第9、第10トレンチからも古代から中世にかけての土器片や陶磁器片が

上したが、これらの地域はその地形や土層の観察から旧湿地帯、さらに古くは旧河川の流路だったと考えられる。

この遺跡は、東は第4トレンチと第5トレンチの間の用水路を境界とし、西は第7トレンチと第8トレンチの間の低地から微高地に変わる段差を境界とすると考えられる。また、北側は現在宅地となっているためはっきりしないが、南側は第7トレンチの南西約330m付近にある低地と微高地の変換点が境界になる可能性が高いと思われる。

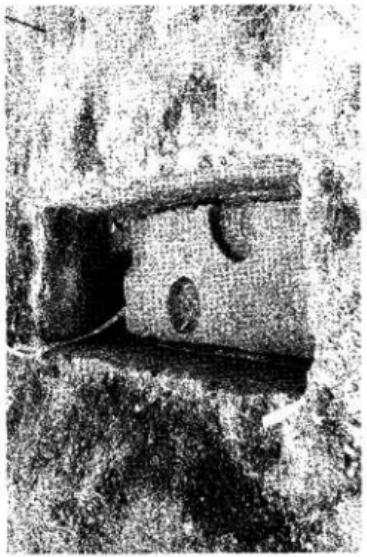
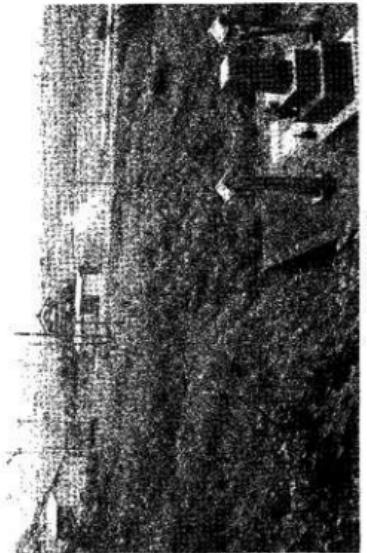
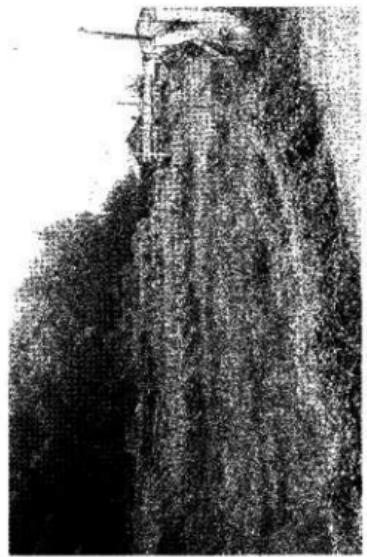
なお第5トレンチのすぐ北側には第4トレンチとの間の用水路に沿った農道からほぼ直角に低地と微高地の変換点まで小道が西進する。この距離は約109mである。またこの変換点から小道とはほぼ直行する形で段差地が北進している。北側は宅地化されているため明確ではないが、その距離は109m強である。また前述の小道が延びる用水路沿いの農道は、北に約109mで交差点となり、ほぼ1町四方の区画が認められる。前述の耕地整理がなされていないことなどを考えあわせれば、この地域に条里遺構が遺存する可能性もあることを付記しておきたい。

3. 秋里遺跡

秋里遺跡の今回の調査ではいくつかの遺構とともに各種の遺物が出土した。試掘調査という制約のため各トレンチを拡張してそれらの性格を確認することはできなかったが、既往の発掘調査の結果と基本的には同様であると考えられる。遺跡の初源は、第4トレンチから出土した弥生時代中期の上器片によって遡ることになったが、中世・近世まで継続する遺跡であることが再確認できた。遺構についてみてみると、前述のとおり中世・奈良時代から平安時代・古墳時代後期の遺構が検出できた。第2トレンチなどから検出した柱穴の有様は単に祭祀遺跡として括れるものではなく、集落遺構の存在を強く示唆しているものといえよう。また、第6トレンチではくり抜いた木材に杭を打ち込んで固定するといったあまり類例のない遺構が検出され、今後の調査への期待が今まで以上に広がったと言えよう。

最後に遺跡の範囲について触れておきたい。今回の調査は秋里遺跡の南西部付近の試掘調査であったが、その結果、南側は少なくとも第3トレンチまでは遺跡の範囲が広がるものと思われる。第9トレンチおよび第10トレンチから溝状遺構などを検出したものの、これらは近年行なわれたは場整備前の用水路と考えられる。このことから、西側の境界線を第6トレンチと第9・第10トレンチの間くらいに引くことができよう。しかしながらたびたび述べているように今回の調査は狭い範囲の試掘調査である。したがってここで遺跡の範囲外とした地域についても今後も注意を払っていく必要があることを付記しておきたい。

図版 1



3. 同 第1トレンチ (南東から)



4. 同 墓穴住居状遺跡 (南西から)

図版 2



1. 西大路土居遺跡 第2トレンチ (北西から)



2. 同 第3トレンチ (南東から)

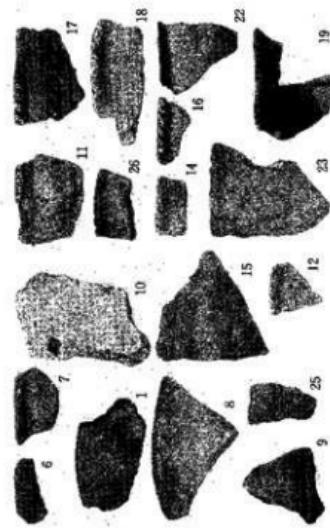


3. 同 第4トレンチ (南東から)

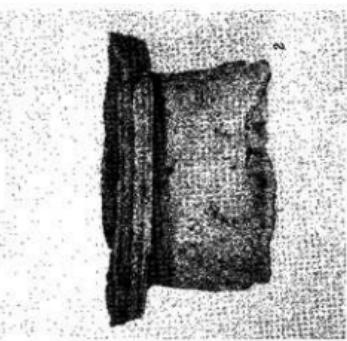


4. 同 第4トレンチ遺物出土状況 (北東から)

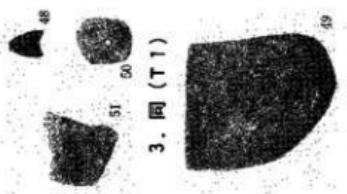
図版 3



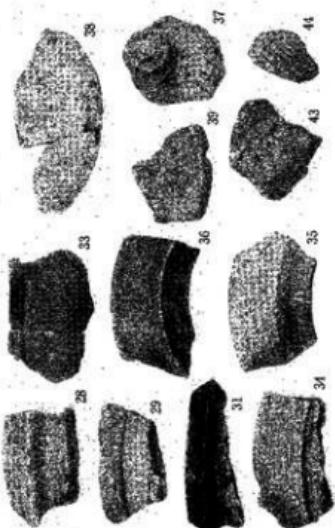
1. 西大街土層遺跡出土遺物 (T1)



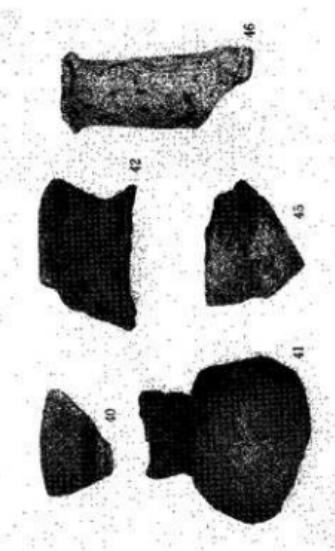
2. 同 (T1)



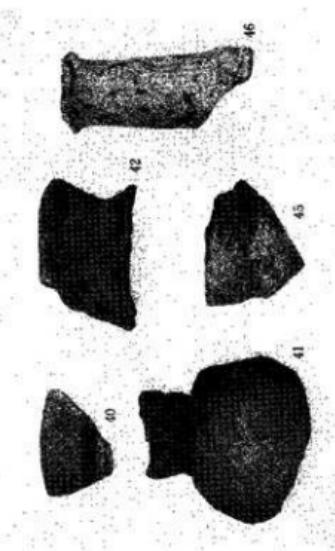
3. 同 (T1)



5. 同 (T1)

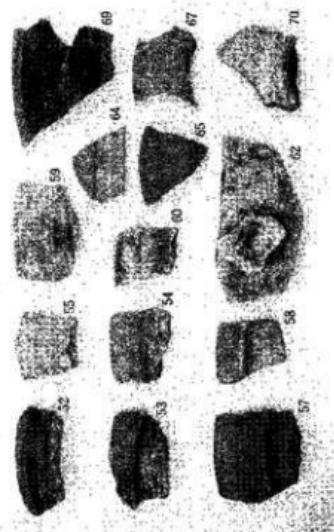


4. 同 (T1)

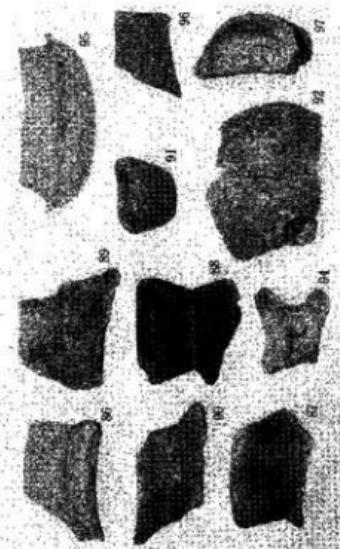


6. 同 (T1)

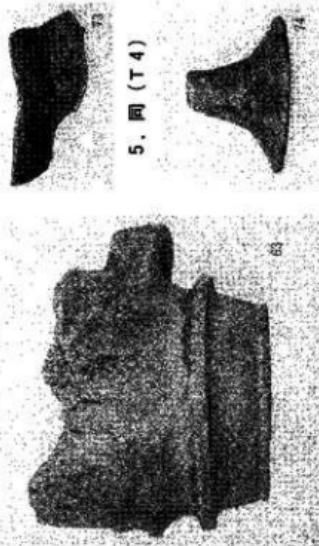
図版 4



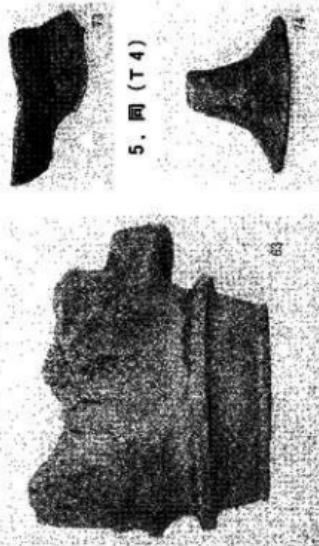
1. 西大路土居遺跡出土遺物 (T 4)



3. 同 (T 4)



5. 同 (T 4)



6. 同 (T 4)

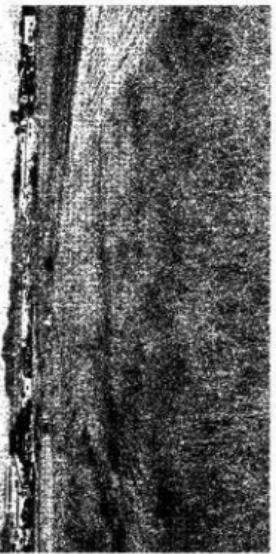
図版 5



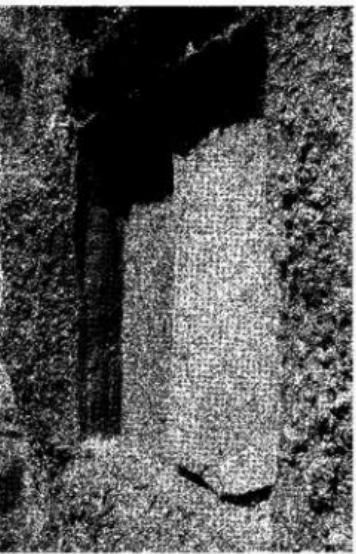
1. 宮長竹ヶ鼻遺跡 調査地遠景 (南東から)



2. 同 (南東から)



3. 第2トレンチ (北西から)



4. 第3トレンチ (北西から)

図版 6



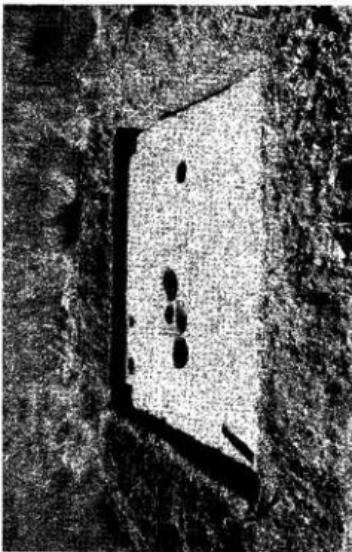
1. 宮長竹ヶ鼻遺跡 第5トレンチ (南東から)



2. 同 第6トレンチ (北東から)

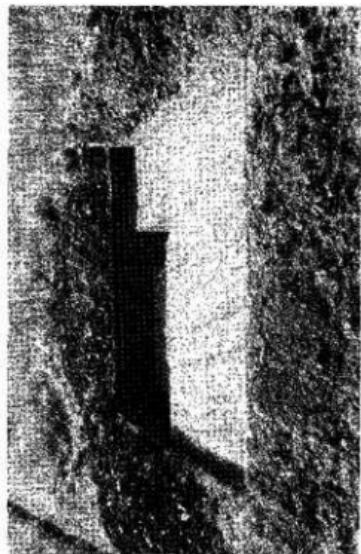


3. 同 第6トレンチ壁面部分 (南西から)



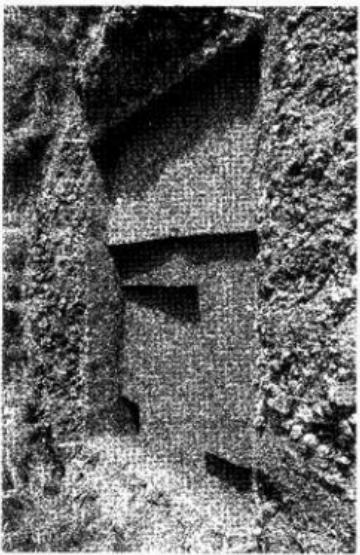
4. 同 第7トレンチ (北東から)

図版 7



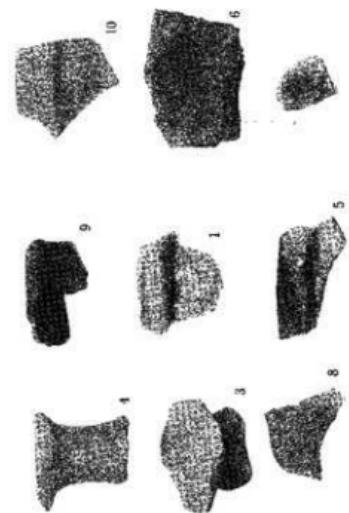
1. 宮長竹ヶ森遺跡 第7トレンチ (南西から)

2. 同 第8トレンチ (北東から)

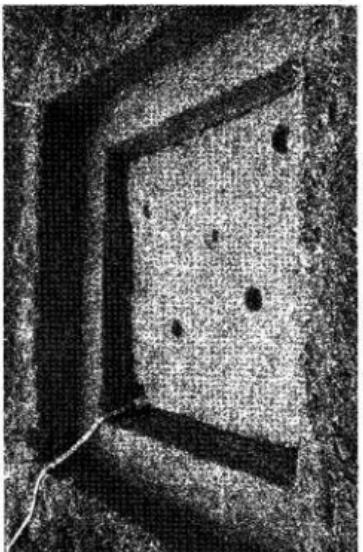


3. 同 第9トレンチ (北西から)

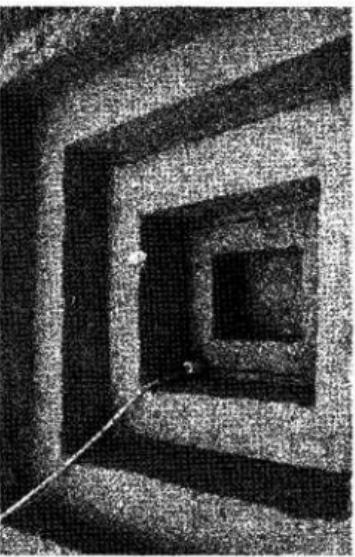
4. 同 出土遺物 (T4, T5, T6)



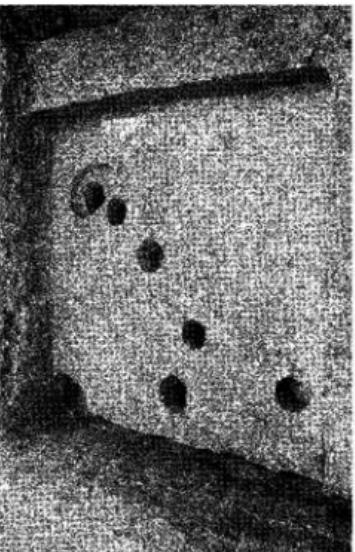
図版 8



1. 秋里渓跡 調査地近景 (南西から)

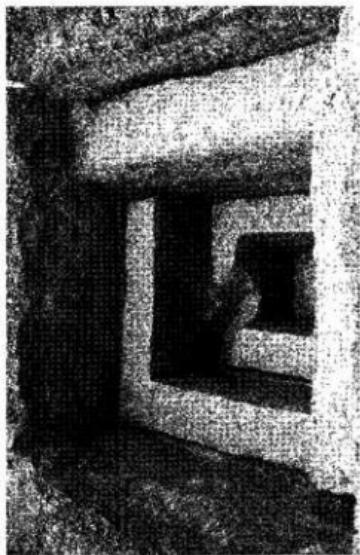


3. 同 (北から)

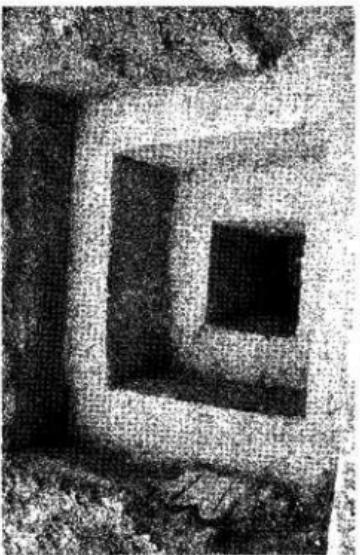


2. 同 第1トレンチ (北から)

4. 同 第2トレンチ (西から)



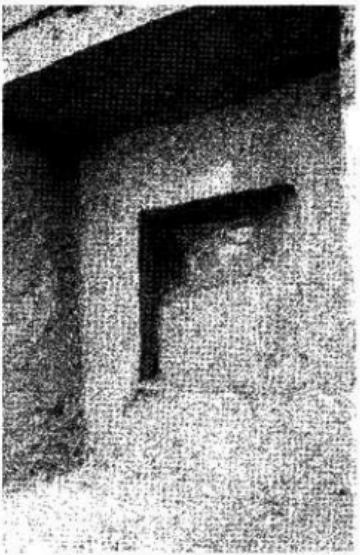
2. 同 (東から)



4. 同 (西から)

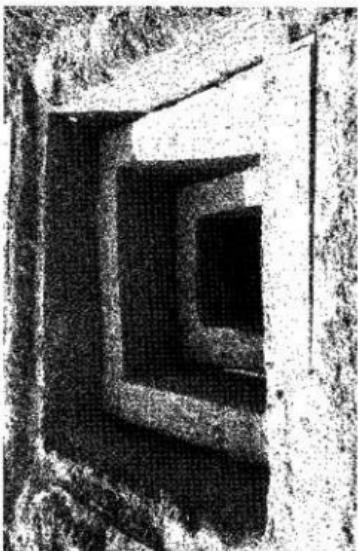


1. 秋里溝跡 第2トレンチ (北から)



3. 同 第3トレンチ (西から)

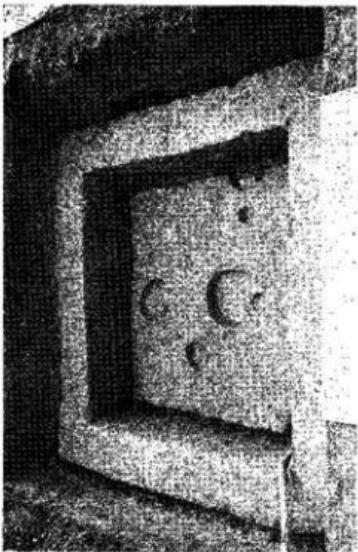
図版 10



1. 秋里遺跡 第4トレンチ（北から）



3. 同 第6トレンチ木柵遺構検出状況（南から）

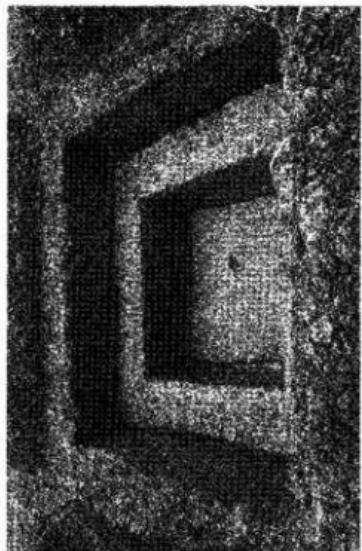


2. 同（北から）

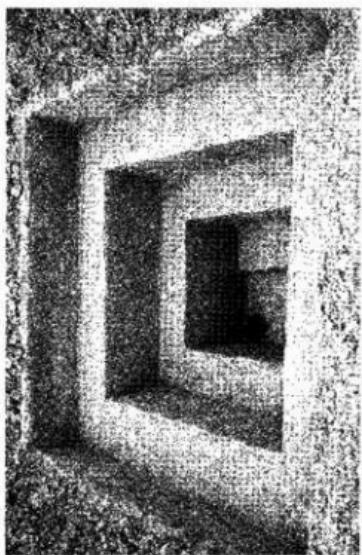


4. 同 第6トレンチ（北から）

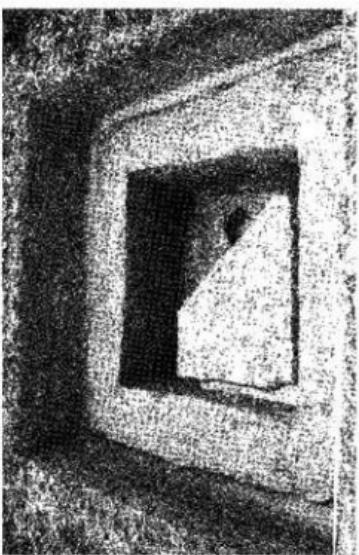
図版 11



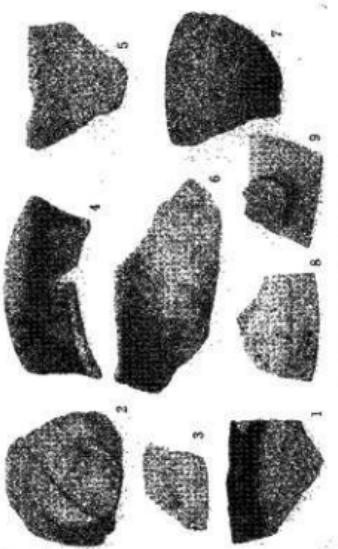
2. 同 第8トレンチ(南西から)



1. 秋里遺跡 第7トレンチ(東から)



3. 同 第10トレンチ(東から)

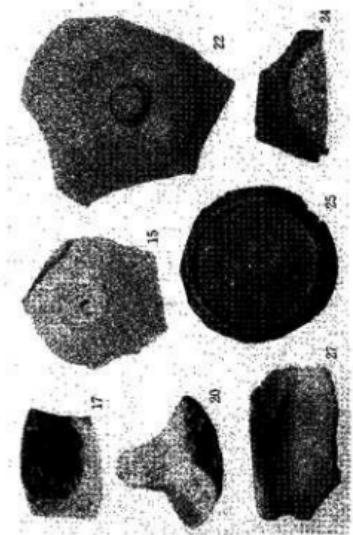


4. 同 出土遺物(T1, T2)

図版 12



1. 秋里溝跡 出土遺物 (T2)



2. 同 (T2)



3. 同 (T3, T4)



4. 同 (T4, T6)

鳥取市文化財報告書 27

鳥取市内遺跡

発掘調査概要報告書

平成2年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会

印刷所 株式会社 矢谷印刷所